

島原公民館蔵 『平治物語』翻刻
松平文庫本

和田英道

永積安明氏は、『平治物語』の諸伝本を第一類から第十一類まで分類され、その中の第一類本が最も原初形態の本文に近いことを提唱された^(注1)。その後、この第一類本古態説は、安部元雄・犬井善寿・日下力氏等の考察によって、より強固なものになった。今後『平治物語』の研究は、第一類本を中心に行われていくものと思われる。

この第一類本に属する現存本は、陽明文庫蔵本・九条家旧蔵本^(注2) (学習院大学図書館現蔵)・島原公民館蔵松平文庫本の三本である。このうち、松平文庫本は、同じ第一類に属しながら、犬井氏が陽明文庫本・九条家本とは別系列に細分されるほど本文異同が大きく、しかも陽明文庫本・九条家共通の誤りをも補訂し得る場合もある。このように松平文庫本は重要な伝本でありながら、笠柴治・犬井・日下氏の論考中で、その一部本文が陽明文庫本・九条家本と対校されただけで、全文は未だ公刊されていない。そこで、『平治物語』研究の基礎として、松平文庫本を翻刻することにした。

その書誌は、次のとおりである。

〔函架番号〕 一一一——二〔書写年時〕 近世初期写 (松平文庫

目録)は寛永頃の写とする)。「巻冊」中・下巻二冊(上巻欠)。「外題」左上方に本文共紙の原題簽(15.7×3.2。中巻は剝落)。「平治物語下」〔内題〕「平治物語中(下)」(端作)。「寸法」縦25.7×横20.0センチ「装丁」袋綴(原装)。「本文料紙」楮紙厚紙「表紙」青色無地紙原表紙「見返し」本文共紙「紙数」遊紙なし。中巻57丁、下巻50丁「一面行数」10行「用字」漢字平がな交り「書入」濃淡二種の墨書入あり。濃墨は同筆・別筆不明、薄墨は別筆「蔵書印」前表紙見返しに島原松平文庫の朱印あるのみ「奥書等」なし「その他」本文一筆。濁点は別時点て付されたもの。別筆であろう。

(注1) 日本古典文学大系31『保元物語 平治物語』「解説」(昭和三十六年七月 岩波書店)・『中世文学の成立』所収「保元・平治物語の成立」(昭和三十八年六月 岩波書店)。

(注2) 上巻は、未刊国文資料『平治物語(九条家本)と研究』(山岸徳平・高橋貞一氏編。昭和三十五年四月 未刊国文資料刊行会)に付録として翻刻収載。全巻は陽明叢書国書篇第十輯『平治物語・明德記』(犬井善寿氏解説。昭和五十二年六月 思文閣出版)

に影印収載。

(注3) 未刊国文資料(注2既述)に全巻翻刻収載。

(注4)

笠榮治氏『平治物語第一類本と第四類本の間』(長崎大学教養部紀要)人文科学第十巻 昭和四十四年十二月、犬井善寿氏「九条家本系統『平治物語』本文考——二系列細文とその本文の吟味——」(『軍記と語り物』十三 昭和五十一年十二月)・陽明叢書『平治物語』(注2既述)「解説」日下氏「平治物語絵詞」詞書釈文と『平治物語』対照一覽(日本絵巻大成13『平治物語絵詞』昭和五十二年九月 中央公論社)。

本稿の成るに際し、翻刻の御許可を賜った島原公民館に対して、記して感謝申し上げる。

凡 例

(一) 本稿は市立島原公民館蔵松平文庫本『平治物語』を、原本に忠実に翻刻したものである。

(二) 但し、翻刻に際しては、次の方針によった。

- ① 漢字はすべて現行活字体に改めた。
- ② 踊字「ノ」は、漢字の場合のみ「々」に改めた。
- ③ カタカナの「子」は、「ネ」に改めた。
- ④ 虫損で判読不能箇所は、□で示した。
- ⑤ 読みやすさを考え、私意に句読点・中黒・引用符を施した。
- ⑥ 丁変りは(1オ)のように記して示した。
- ⑦ 私注は(一)で囲い、他と区別した。

平治物語中

左馬頭義朝六条河原にをよせて見ければ、六原には五条のはし

をこぼよせて、かいたてかいて待かけたり。かいたての^とにもとにもうちに、つはものともみちノたり。六はら皇居になりたり。「みかたへまいらさらんものは、てうてきたるへし。みなノまいるへし。まいらさらんもの、こうくわいすな」とおほせられしかは、大せいこせいうちつれノ六はらへそまいるける。右衛門督信頼はやうノ六条(1オ)かはらまてうちのそみたりけるか、「あの大勢にてをしつゝ、まれてはかひなき命もたすかりかたし。いつかたへも落行てたすからはや」とおもひければ、山も^{山ももつ}とをにしへ、京極をのほりに落行けり。義朝の童金王丸^{ワラヒナ}をみて、「あれ御覧候へ。右衛門督殿こそをちられ候へ」と申せは、「よしあのおくひやうものにめなかけそ。有ともものゝ用にもあふへくはこそ、なかノあしてまとひに」とぞ宣ひける。源兵庫頭頼政は三百騎はかりにて、五条かはらの(1ウ)にしのつらにひかへたり。悪源太是をみて、「頼正かふるまひこそ心えね。源平^{げんへい}両陳をみはからひて、つよからんかたへつかんとすることさめれ。義平かまへにてはさはさすましきものを」とて、京極をのほりに、五条をひかしへあゆませけるを、兵庫頭おもひけるは、「出雲守・伊賀守六原へゆかは、多しやくせん」とおもふところに、悪源太十五騎のせい、はた一なかれさゝせていてきたる。あはやとみるほに、悪源太大音あけて、「まさなき(2オ)頼正のふるまひかな。源家と名をしらるゝものゝ、二心あるへきや。義平かめのまへをは一たひもいたすましき物を」とて、太刀をひたいにあておめひてかゝり、くもて十もんにさんノにかけければ、頼正三百余騎こせにかけたてられ、むらくもたちにてひかへたる。悪源太一あてあてたるはかりにて、まことのかたきにあらざれば、左馬頭ひかへたる六^条原かはらへ

むきてゆくほとに、兵庫頭からうとう七、八きさん／＼にいければ、悪源太郎等（2ウ）山内首頭刑部丞子息滝口俊通、ひきとまりてたゝかひけり。下総国住人下河辺庄司行康かいける矢に、滝口かくひのほねいさせて心ちみたれけれども、さるつはものなれば、矢をはぬゐてすて、くらのまへわにすかり、かふとのまかうを馬のひらくひにもたせていきつぎゐたり。悪源太是をみて、「滝口は大事の手おいぬとおほゆるに、かたきにくひなとられそ。みかたへとれや」と下知しければ、鎌田下人をまねきて申つけ（3オ）ければ、かの下人長刀もちたりけるかはしりよりて、頸をとらんとしけるを、滝口めを見あはせ、「いかに、をのれはみかたごさんなれ」、「さん候。鎌倉の御さうしの御ちやうに、『大事の手ならは人手にかけそ。御頸をたまはれ』とのおほせなれ」と申ければ、滝口申やう、「いたてのたんしさいなし。弓矢とりはいかにもよき大将につかへき事なりけるそや。かはねをたにもいたはりおほし召て、人手にかくなの仰こそかたしけなけれ」（3ウ）とて、なみたをなかしけるか、「はや／＼くひをとれ」とて、とられけり。父刑部丞、「弓矢とるならひ、かつせんのにはいて、命をすつる事はおもひまふけたる事なれとも、われこそまづうちにして、しそんに弓矢のめんほくをゆつらんとおもふに、すゑはる／＼の俊通をうたせて、おしからぬ老の命残りて何かせん。しての山をももろともにこえなん」と、しんみやうをすてはせめくれとも、命はかきりあるものなれば、つるきのさきにも（4オ）かゝらす。かくて義朝はあく源太こせいにたゝかふかいたはしさに、五条河原へむきてそかゝりける。兵庫頭三百余騎、六原の方へそなりにける。さて悪源太河をはせわたして父と一所になりて、六原へそかゝりたりける。爰をさい

ことを見えし。さきにすゝむ人々は、まつあく源太義平・中宮大進・新兵衛佐・三郎先生・十郎藏人・陸奥六郎・平賀四郎・鎌田兵衛・後藤兵衛・同子息新兵衛・三浦の荒次（4ウ）郎・片切小八郎大夫・上総介八郎・佐々木三郎・斎藤別当・平山武者所をはしめとして廿余騎、六はらへをしよせ、一、二のかいたてきりやふりておめいてかけ入、さん／＼にたゝかひけり。清盛は北のたいのにしつまとのまにいくさの下知して居たりけるか、とひらにかたきの矢あめのことくにあたりければ、清盛大にいかりて、「はち有さふらひかなければこそ、これまでかたきをちかつけたれ」といふ（5オ）まゝに、庭にひきたてたる馬をゑんのきはへ引よせ、清盛その日のしやうそくには、しかまのかちのひたゝれにくろいとをとしのよろひに、くろほろの矢の十八さしたるをかしらたかにをい、ぬりこめとゝうの弓もち、こくしつのはきはき、くまのかわのつなぬきをそはきたりける。黒き馬の八寸はかりなるに、くろくらをきてそのりたりける。「あはれ大將軍や」と、いつれも／＼おとなしやかにそ出たち（5ウ）ける。しろかねにて大くわかつたうつたりける、ましろくかゝやきてそみえし。はらまきに長刀やりもちたるかち武者三十余人、馬のせんこにはしりちりて西の門よりかけいてけり。嫡子重盛・次男宗盛・三男智盛、その外一門の輩三十余騎、大將軍をうちかこみ、我さきにとそかけたりける。重盛は源兵庫頭にめをかけてそすゝみける。頼政も三百余騎、かはらをにしへそかゝりける。左馬頭は兵庫頭に（6オ）かけられて、川をわたし、にしのかはらに引しりそき、しはらく馬のいきをつかせ、「こゝはさいこそ。兵とも、ひと引もひくな」とて、くつはみをならへておめいてかけたりけり。兵庫頭三百余騎、川を東へひきしりそく。源平、川をへたて

ゝさゝへたり。義朝のたまひけるは、「やとの、兵庫頭。名をは源兵庫頭とよはれなから、ゆひかいたく勢平氏にはなとつくそ。御辺の二心にて、当家の弓矢にきつつきめることこそくち(6ウ)をしけれ」とたかこゑにたまひければ、兵庫頭頼正、「累代の弓矢の芸うしなわしと十禅の君につき奉は、またく二心にあらす。御へんは日本一のふかくしんの信頼にとうしんして、たうけのうき名をなかつこそちしくなれ」と申せは、義朝はことほりにせめられて後には物ものたまはず。かゝりける所に、伊藤武者景綱・筑後守家定、五百きのせいにて川のひかしのはたをのほりにあゆ(7オ)ませけるをみて、鎌田申やう、「あれ御覧候へ。かたきこそわれらをとこめんとて、まはし候へ。爰をはしりそかせ給ひて、ことのやうを御覧せられ候へ」と申ける。義朝、「ひかは、いつくまでのふへき。うちによりほかはへちのき有へからず」とて、やかてかけんとしければ、鎌田馬よりとひをり、くつはにとり付、「是は存む候て申候。御当家は弓矢とりては神にも通し給へり。まさしく平家のめのまへに御かはねをとめ、馬の(7ウ)ひつめにかゝらせ給はん事、口惜しかるへし。またく御命をおしむにはあらす。爰は馬の足きゝよき所なれば、うちやふりておはら、しつはらのしんさんのなかへはせ入、御しかいあるへきか。もし又のひさせ給ふへきは、北陸道にかゝりて東国へ下給ひなは、東八ヶ国に誰か御家人ならぬ人候。世をまたん大將のさうなく御命をすてられん事、かうたいのそしり有へし」と再三いさめけれども、猶かけんとしたまひけるを、(8オ)郎等とも馬のむなはいはるひくつはなにとりつき、にしへむきてを引てゆく。六はらの兵ともおひかけければ、いよ／＼義朝かけんとしたまへとも、郎等ともはなさねは、

(山ももむ)

山もとをにしへ、京極をのほりにをちてゆく。平家の郎等ともかつにのりていつくまでと追かけ、さん／＼にいける所に、義朝のせいの中にこんちの錦のひたれにもよきにほひの鎧にうすくれなゐのほろかけて、白つきけなる馬(8ウ)にのりたる武者たゝき返し合、名のりけるは、「ざりとをとにはきゝつらめ。信濃国住人平賀の四郎源義信生年十七歳、われとおもはむものあらは、見参せん」といふまゝに、さん／＼にたゝかひけり。これをみて、「同じき国の住人片切小八郎大夫景重、相模国の住人山内首頭刑部丞義通」と名のりて返し合す。「武蔵国住人長井斎藤別当実盛」と名のりてとて返す。これらしんみやうを(9オ)をしまず、さん／＼に名のりかけ／＼数刻たゝかひけるにそ、義朝ははるかにのひにける。さても山内首頭刑部丞は、嫡子滝口かうたれたるところなれば、なきあとまでもなつかしうおほえ、「うち死せん」とおもひさため、大せいの中へかけ入、かたき三騎きりてをとし、後はよきかたきとひくみとつてをさへてくびをとり、立なをらんとしけるを、かたきすきをあらせずとりこめて、首頭刑部丞をうちにける。(9ウ)かゝるところに片切小八郎大夫景重をみて、刑部丞かうたれにける大勢の中へかけ入、よきかたき一騎きつておとし、其後おもてもふらすたゝかひける。うんのきはめにや有けん、太刀二におれければ、刀をぬきしころをかたふけつとより、よきかたきとさしちかへてそしにける。此ものともふせきたゝかひうちしにしけるに、義朝は延ゆきけるこそあはれなれ。かつせんすてにすぎければ、信頼(10オ)卿宿所・義朝六条はり河の館・末実大炊御門堀川の家、以上五ヶ所に火をかけたなり。をりふし風はけしくふき、とかなき民屋数千家やければ、余煙京中にみち／＼てけり。かのか

んやうきうの煙、雲とのほりしつたへきくは、外国のむかしなり。

たゞいま此平安城のゑんしやうをおもひなけかぬ人はなし。爰に義朝に相したかふ兵とも方々へ落うせければ、小勢にな(10ウ)りて比叡山のにしさかもとすゑをすぎ、おほはらといふ処へそ落ゆきける。やせといふ処をすくとしける処に、西塔法師百四、五十人みちをぎりふさきて、さかもさひきて待かけたり。此ところは一方は山きしたかくそはたて、一ほうは川のなかれ漲落たり。「うしろよりはかたきさためてせめ来へし。前には山門の大しゆさへたり。いかゝせん」といふ処に、斎藤別当真盛ふせきやいて候けるか、(11オ)「爰を是真盛とをし奉らん」とて、まさきにすゝみて甲をはぬいてたかひほにかけ、弓わきにはさみ申やう、「是は年比頼候主君はうたれ候ぬ。いふかひなき下人くわしやはら、はちをまかへりみす、死をかなしみ、さいしをはこくみ候はんとて、国々へにけ下候者ともにて候。頸をめされ候とも、つみつくらせ給ふはかりにて、しよせん有まし。たまゝ僧徒の御身にてまし候。山門又さる御事候。たとひ又さりぬへき(11ウ)しんにて候とも、みなさのみこそ候へ。まして下劣のものともをうちとめさせ給ひて、なにの御用か有へき。御たすけ候へかし」と申せは、大衆とも、「さらはものゝ具ともをみなゝぬけよ」と申。此事いはせもはてす、もちたる甲をわが大衆の中へなけたりける。下部法師はら、「我とらん、人にとられし」とはひあひけるほとに、或法師はひかちてうちはらひてたちたりけるを、真盛おかしとおもひて、馬にうちのりつと(12オ)はせより、かの甲をひん□ひうちきて太刀をぬき、「ざりとも法師はらもつたへ聞つらん。日本一の大かうの者長井斎藤別当真もりなり。我とおもはんものはよりあへ、せうふをせん」とて、

一むちうちてつととをるあひた、義朝以下の軍兵とも一きものころすはせぬけけり。去ほとにかちたちの大衆とも、馬におもひよらすかけられて、或は川に入水におほれ、或は谷にころひ岩にすられて、おほくそうせにける。(12ウ)さねもり□はかり事にて、爰をふぬにそとをられける。さて八瀬川のはたを北へむきてをちける処に、人の声のしけるを義朝きとみければ、今はいつかたへもにけぬらんとおもひつる信頼卿、「いかにや東国へ落たまは、同じく我等もくし給へ」と申されければ、義朝あまりのにくさにはたとにらみて、「あれほとの大おく病の者の、かゝる大事を思立たる事よ」とて、持たるふちをとりなをし、左のほうさき(13オ)を二打、三打を打たりける。めのとの式部大夫助能、「いかてかやうにはちをはあたへ給ふぞ」と申ければ、義朝いかりて宣やう、「あのおとことて口さけ」とのゝしらければ、鎌田申けるは、「時にこそより候へ。今一足も延させ給へ」と申せは、はんしをすて、はせのひけり。信頼卿はつらうたれたる所も恥かしく、かほのうちめもいたければ、つねにかほををしさすりゝそしける。いつくをさすともしらす、たゞ山にそふてにしへ(13ウ)むいてそ落行ける。三郎先生・十郎藏人以下義朝に申されけるは、「なにともし候て東国へ御下候て、八ヶ国の兵とも普代の御家人にて候へは、是等をなひけ、宮こへ時刻をめぐらさすせめのほらせ給はん事、何の子細候へき。其間は我々もまつ山林にみを隠し、御せんととの御大事には逢ふへき。御名こりこそをしけれ」とて、泣々大原のかたへそをち行ける。義朝も此人々とまりければ、心ほそけにみられ(14オ)ける。さてりうけこえにかゝりける処に、横川法師二、三百人、をち人とゝめんとて、道切塞たりき。所にはいし弓をはりて待かけた

る。「八世をこそとかくしてとをりたれ。又爰をはいか、せん」とい

(基)

ふ処に、後藤兵衛、「爰をは夷蕃にはからはせよ。命を捨てとをし奉らん」とて、さきにすゝみて、「あしかるともよれや」とて、さかもぎとりのけ、はせおめいてかへとをる。左馬のかみ以下のつはもの、一きも残らず通りけり。い(14ウ)し弓はりたれとも、一人もあたらずとをりけり。爰によしとものおち陸奥六郎義隆はさかみのもりをちやうせしかは、毛利冠者とを申ける。この馬つかれければ、すこしさかりたりけるを、法しはら取こめてさん／＼にいけるほとに、義隆太刀打ふりておひはらひけれども、山かけのみち難所なりければ、馬のかけはもなし。結句うちかふとをいさせて心ちみたれければ、をり立てしほ／＼と木の根によりかゝり、(15オ)いきつきぬたり。山徒の中にたけ七尺はかりなる法師、黒皮おとしのはらまきに大長刀もちたりけるが、義隆をうたんとよりあひけるを、上総介八郎とつて返して馬よりをり、件の法師にうちあひたり。爰に介八郎下人義朝にをいつきて、「毛利殿こそいたておひてまし／＼候を、かたきに御頸とらせしとて、介八郎殿かへしあわせさせ給ひ候か、かたき大勢にて候間、それも今はうたれさせ給ひ候らん」とつ(15ウ)けたりければ、義朝きゝもあへすとつてかへし、おめいてかく。平山武者所・長井斎藤別当真盛も、同じくまどきにそかけたりける。義朝上さし取てつかひ、「にくきやつはらかふるまひかな。其儀ならは、一人もあますまじきものを」とて、かけ給ひければ、山徒等にけちりけり。義朝つかひたりける矢なれは、ひやうとはなつ。山徒の中のとおりやうかとおほしきかはらまきのをしつけのいたをつといぬき、むないたのはつれへ(16オ)矢さき六寸はかりいてければ、やかてうつふしにまろひけり。かやう

にかたきををひはらひて義朝馬よりおり、毛利冠者かゝたりけるところにゆきて手をとらへ、「いかに／＼」とのたまひければ、しばらく有て毛利六郎めをすこし見ひらき、なみたをはら／＼となかし、義朝をみて、それをさいこにて、やかてはかなくなりける。

義朝めもあてられす、あはれにおもひて上総介八郎に頸をとらせて、義朝手つから彼頸を持、落(16ウ)行けるか、人にしらせしとやおもはれけん、はなかほのかはをけつり、いしに頸をむすひそへ、ふかき淵にそ入にける。愛子の坊門のむすめをみてたにも落なみたをつゝみしに、此人のわかれには人めをものは／＼からす、「八幡殿の御末には、此殿こそ有つるに」となけきければ、らうとうともよろひの袖をぬらさぬはなかりけり。さて、「北陸道へおもむかは、京とのみたれを聞て京へのほらんものおほかりなん。たれとしらぬ(17オ)そうひやうにあひ、いぬしにせんもむやくなり。中々これよりひかし坂本へかゝらは、たとひ人あやしむとも、洛中のさうとうによりはせ上るよしをいは／＼、然へし」と評定して、東坂本をとせれとも、とかむる者もなし。志賀、からさき、大津のうらを過てゆきけるか、せたには橋もなければ、ふねにてそわたりける。すゝか、不羽両関は、平氏に心さし有ものともかためたりと聞えけれども、「ざりとは不破の関にこそかゝら(17ウ)め」とて、かいたうそ下ける。後藤兵衛さねもと、きはめてふとりたる。馬はつかれぬ。かちになりてかなふへくも見えず。義朝、「さねもと、はやとまれ」とさい三のたまひければ、なく／＼とゝまりぬ。京都のかつせんをきゝてはせのほる兵とも、あやしけにみる間、しゝうはあしかりなんとて、みかみの山、かゝみ山のふもとにかゝり、木ふかき道をわけ入、夜まきれにいふきの山の西のふもと

に着にけり。さて右衛門督信頼(18才)卿は、きた山の麓^{ノボ}につきてにしのかたへをち行けるか、ときのごゑに心ちをそんしたりけるうへ、世間もはやなんきになりゆく。義朝につらぶちにてうたれけるより弥草伏はて、さん／＼の事ともなり。式部大夫助能、有たに川のはたにおろし置てほしいひあらひてすゝめけれとも、胸^{ムネ}ふたかりて一口もくわざりけり。又やう／＼馬にかきのせて、かゝへたすけゆく。比は十二月廿七日のよなれば、雪ふりつみて谷も(18ウ)みねも見えず。しらぬ道を馬にまかせてゆくほどに、れんたい野へそ出たりける。死人さうしてかへりける法師はら、おとこまじりて十四、五人、或はそやをひ、或は長刀のさやはつしたるもあり。たいまつともしたるにゆきあひたり。是をみて、「落人有り。めしとりて六はら殿へ参らすへし」とひしめきけり。式部大夫申やう、「我等は大將軍にもあらず。人かすならぬ雑兵打とめてなにかせん。さうそうしてかへり給ふ(19才)そうそくなると見申。我等めしとり給は、亡者のつみふかゝるへし。ものゝ具をを参らすへし」といひければ、「さらはぬけ」とて、うへより下までこと／＼くぬきてとらせければ、此はうしはら、ものゝ具いろ／＼の小袖ともとりて、死はかりはたすけり。けさまでは信頼卿、あかちのにしきのひたゝれにねりぬきのこそてきて、せいかうの大口によきよろひきてはなやかにありしか、大ひやくゑにそ成たり(19ウ)ける。式部大夫助能、「さこそ花報つきはて給ふとも、かゝる御事や有」とくとぎければ、信頼は、「よしさな思ふそ。ことのあしきとさはたれもかくこそあれ」となくさめけるこそはかなき。さても上皇は仁和寺の御室にましますよしを承て、むかしの御めくみにや、御たすけもあらんすらんとおもひ、信頼卿くひをのへてそまいりけり。

る。伏見源中納言師仲・越後中将成親もまいりけり。(20才)此人々ちんし申されけるは、「主上わたらせ給ふあひた、まいりこもりたるはかりなり。させるさいくわなき」よしを申されければ、つきたてまつる人々は、「何とて物具して軍陳には打たちけるぞ」とつめられて、両人口をもあかすを有ける。やかて六はらへ此よし仰られければ、左衛門佐重盛・三河守頼盛・奥陸守経盛、大将として其勢三百余騎、仁和寺の御所へ参りて此人々をとり、六原へそ帰りける。同十二月(20ウ)廿八日、六原へ参る人々には、大殿関白殿・大政大臣師資・左大臣伊通・花山院大納言忠雅・土御門中納言雅通・四条三位親隆・大宮三位隆季を参られける。さて越後中将成親は、六原へ召わたされけり。すりのひたゝれにゑほしひきたて、六はらのむまやの前にそ引すへられたる。すてにしざいに定りけるを、重盛、「今度のくんこうに此成親をあつかひ候はん」と再三申されければ、しざいをなため(21才)られけり。此成親、院の御気色よかりければ、重盛出仕のとき、情をかけしいはれなり。「いかに人は情有へかりける」とそ申あひける。右衛門督信頼卿は六はらちかき河原に引すへて、左衛門佐重盛をもて子細をたつねられければ、申いたしたるむねもなく、たゝ「大天魔のすゝめなり」とそふるひ／＼申ける。我身のちうくわをはしらす、「命ばかりをを御たすけ候へ」と泣々申されければ、重盛、「なためておはす(21ウ)とも、いかほどの事候へき。其うへよまたすけ申候はし」と申されければ、足すりをしてたゝ泣より外の事はなし。「此月の十日より内裏にすみて、さま／＼のひかことをのみ申おこなひしか、けふの有様もあてられす」とけんふつの上下申あへり。さて信頼卿おめきさめくとも、かなはず、つゐにくくひをきられけり。さしもかう

かんよきおとこのこゑふとりたるか、くひはとられぬ、むなしきむくろ^(はカ)うつふしにふしたるを、まさこ(22才)ふみかけられ、をりふしいとう雨ふりたりければ、血はあけになれてくれなゐのことにし。うめむしやうのことはり、いまにはしめさる事なれとも、哀なりし事とも也。かゝりけるところに、よはひ七十はかり成入道の、かきのひたゝれに文書袋くひにかけたるか、ひらあしたはき、かせつえにすかり、しきりにしわふきしたるか、大勢の中へにけ入り。「信頼卿ちうたいの者、主君のはてをみんとて来りたるらん」なとり／＼(22ウ)に申けるに、さはなくして、むくろをしかににらまへて、もちたる杖をとりなをし、二打、三打そうちたりける。見物の者あやしとみるところに、此入道申やう、「相伝の処をむりにをのれに押領せられ、巨多の家人をうしなひ、わかみ孫子がしに及も、たゞ此ものゝしよきやうそかし。因果によてくひをきられて、めのまへにはちをさらす。入道はいままでいきてかのしかいをうつ。このつえはしゝたるあひた、よも覚し。こくそつ(23才)のしもとにうたるらん。こんはくあらは、この事きけ。大武清盛嫡子左衛門佐殿は賢者のめいよおはしませは、此公驗文書をけんさんにいれ安堵して、をのれにはくさのかけにてみせんするとおもふさへ猶にくきそ」といひて、又一打を打たりける。かくて重盛は六はらへかへり、信頼かうへをはねたるよし披露ありければ、「さいこはいかに」とめん／＼たつねられける。重盛、「かた／＼不便なる中に、をかしき事(23ウ)とも候。かつせんの日、馬よりをちてはなのさきかきて候。又落行とき、義朝につらうたれて有けるひたりほうさきに、鞭目のうるみて候し」と申されければ、大宮大臣伊通公申されけるは、「一日のさるかくにはなをかくといふせぞくの

狂言有。この信頼は一日のかつせんにはなかきて候」とのたまひければ、一とうにわらひけり。御所様もきこしめして、左少弁成頼をめされて、「何事をわらひ候そ」と御たつね有る。(24才)成頼此よしを奏聞せられければ、主上も多つほにいらせをはします。此伊通公はせち多行幸のみきり、天下の御大事儀定の時も、ことをかき事をのみ申されければ、公卿殿上人みな／＼興に入て有ける。されとも才覚人にすくれ、芸能世にこえ、朝家のかゝみにておはしければ、君もおほしめしゆるし、臣も誹をなさす。さて伏見の源中納言師仲卿、しさいを尋らる。「師仲けんしやう(24ウ)蒙へき身にて候。其ゆへは信頼卿内侍所をすてに東国へくたしまいらせんと候しを、女房坊門の局の宿所あねかこうしひかしの洞院にあつてをきまいらせ候へは、朝敵に与同せさる所見なり。信頼卿伏見へ時々来りしも、権勢におそれ心ならぬましはりにてこそ候しか。よく／＼きこしめしひらかるへし」とを申されける。さて河内守末実、同じく子息左衛門丞末盛ふし、ともにきられにけるこそ(25才)むさんなれ。さるまゝに平家、今度の合戦のけんしやうおこなはるゝ。大武清盛嫡男左衛門佐重盛、伊与守に任す。次男大夫判官豊盛、大和守に任す。三男宗盛、遠江守に任す。清盛舎弟三河守頼盛、尾張守に任す。伊藤武者景綱、伊勢守任す。上卿花山院大納言忠雅、職事は藏人左少弁朝方とそきこえし。信頼卿兄兵部権太輔頼家・民部権少輔元通・新侍從信親・尾張少将信(25ウ)俊・播磨守義朝・中宮大進朝長・兵衛佐頼朝・佐渡式部大夫重成・但馬守有房・鎌田兵衛丞正清、基親類縁者十三人かくわんしよくをと、めらる。昨日までは朝恩によくしてくわんしよくを蒙りしかとも、けふは誅伐を蒙る。夢のうちのたのしみ、さめてのかなしみなり。一夜

の月不定の雲にかくれ、あしたのたのしみ、夕のなみたなり。へんしの花むなしく無常の風にしたかふ。この(26オ)ことはり、かんせんに有。生死のさかひ、たれか此なんをのかるべき。堀川天皇の御宇嘉承二年、対馬守源義親誅伐せられしよりこのかた、近衛院御宇久寿二年にいたるまで既三十余年、天下風静にして民屋堯舜のまつり事にほこり、海内波おさまりて、国延喜天曆の徳政にたのしみしに、保元の合戦有ていくはくの年月をも送らるに、又此兵乱いてくる(26ウ)あひた、世すてに末になりて国亡へき時節にや有らんと、心有人は歎けり。同廿九日、又公卿僉儀有り。「此程大内には凶徒殿上にしゆくして有間、きよめられすして、行幸ならむ事しかるへからず」とさため申されしかは、八条烏丸の美福門院の御所へ行幸なる。左衛門佐重盛は直衣に矢おいて供奉せられけり。さても左馬頭義朝、末子三人有。九条院雑仕ときはかはらなり。兄は今若として七になる。中乙若として五に(27オ)なる。末は牛若としてとし生れ、一歳の子也。義朝これらか事を心くるしくおもひをきて、わらは金王丸を道よりかへして、『合戦に打まけていつかたもなく落行候へ。子ともにこそ心とまれ。いかなる遠国なりとも、心やすき事あらは、むかへとるべきなり。其ほとは深山にも身をかくして、我をとつれをまち給へ』と申給ふ」と申ければ、ときは、聞もあへず、引かつきてそ伏にける。子とは、父はいづくにそ(27ウ)と声々にそなけきける。ときは泣々をきあかりて、「さても督殿はいつかたへとかおほせられつる」ととひければ、「さうてんふたいの御家人ともをたのみあて、東国へと仰られ候つる。片時も覚束なき御事に候へは、いとま申て」とて、いてんとしけるを、今若金王か袖をとり付て、「我はすてに七になる。おやのかた

きうつへきほとのにあらずや。をのれか馬のしりにのせて、父のまします処へくしてゆけ。とてもわれら、爰(28オ)□ありてものかるまし。平家の郎等の手に渡らんより、金王か手にかゝらん」とかきときなきかなしみければ、金王めもあてられす、見すてん事もいたはしく覺て、「督殿は東山にしのひてまします。夜に入て御迎に参らん。まつ袖はなさせ給へ」とすかし奉れば、手をはなし、なみたをこほしなから、うれしけなる気色見えけるこそあはれなれ。金王丸いとまを乞て出しかは、「督殿の御事を申せば、金王かなこり(28ウ)さへおしきかな」とおとなしやかにさきとくこそあはれなれ。少納言入道信西か子とも僧俗十二人、をん流にしよせらる。「君の御ためには命をすてたりし忠臣の子ともなれば、信頼・義朝はからひとしてなかせられたりとも、てうてき亡なは、やかてめしかへされてちうしやうにこそあつかるべきに、結句流罪のとかに処すへき、信頼卿ふるまひ、天聴にやたつせんすらんとけうふして、新大納言経宗・別当惟方申すめたるを、天下(29オ)の乱にまぎれて君も臣も思召あやまて有ける」と心有とも、かく申あへり。此人々は内外の知人にすくれ、和漢才芸身にあまりたりしかは、配所へおもむく其日までも、爰かしこの宿所によりあひて詩をつくり歌をよみて、たかひに名残をおしみける。すてに方々へ下向するあひた、おもふ心ともをよみて、二とまり三とまりへそをくりける。西海にをもむく人は、八重のしほちをわけゆく。東国へおもむく人は、ちさとの(29ウ)山河をへたて、ふしのけふりに心をやく。せき／＼のやとりかはり、月日もかさなるにつけても、つきせぬものはなみたなり。中にも播磨中将成範は、老母といとけなき子をふり捨て遼遠のたひにおもむきける心のうち、いふはかりなし。

せめての都のなごりをしさにみやこのかたをみやり、あわた口に
て、

東路のくさの青はに駒とめて猶古郷をかへりみるかな
かくてはる／＼東国へをもむけは、なるみのうらのしほひかた、二
むらやま、(30才) みやち山、たかし山、はまなのはしを打渡り、
さよの中山、うつ山、とし比みやこにては名をのみ聞しふしのた
かねを打討、あしから山を過行は、いつくをはてともしらぬむさし
野、ほりかねの井も今そみる。去ほとに下野国のこうに付て、我
住へかんなるむろの八島をみやり給へは、けふり心ほそく立、折か
ら哀なりければ、

我ために有ける物を下野やむろのやしにたえぬ思は

此処を夢にもみん(30ウ)とはおもはざりしに、草の庵何にたとへ
んかたもなし。只むかし今のことゝも、いふにかいなき露の命のな
からへて、柴のとのあけぬくれぬと過ゆくことこそかなしけれ。平
治二年正月朔日、あらたまのとし立かへるあしたなれとも、元日元
三のきしき事よろしからず。内裏には天慶のれいにまかせて朝拝も
とゝめらる。上皇は仁和寺にましませは、拝礼もなかりけり。同五
日、左馬頭わらは金王丸、九条雑仕ときはかたへ忍て来り。(31才)
馬よりこほれ落、しはらくはいきたえてもいはず。ほとへてや
う／＼申やう、「督殿は過つる三日の晩、尾張国のまと申処にて、
重代の家人長田四郎忠宗か手につけ奉りて、うたれさせ給ひぬ」と
申せは、ときはをはしめとして家内の者、声々になき歎けり。誠に
なげくもことはりなり。まくらをならへ袖をつらねし中なれは、身
独なりとも歎へし。いかにいはんや、兄は八、中は六、そのおとゝ
は二歳なり。三人なから男子なれは、「只今もやうきめをみん(31

ウ)すらん」と泣かなしむこそ理なれ。さて最後の有さまをせめて
ものことに尋られければ、金王なみたをのこひ申けるは、「督殿た
ゝかひにまかせ給ひて大はらへかゝらせ給ひ候しに、八せりうげ
所々にて山徒と御合戦候て、うちらはひて西近江へ出させ給ひ、北
国よりはせ上るせいとなりて、東坂本、からさき、志賀のうらにか
ゝらせ給ひしかとも、とかく申者も候はず。せたをは御舟にて渡
し、のちよりみかみの山の麓にそひてかゝみ山のかくれにまされ
(32才)て、あち川へ御出候しか、『兵衛佐／＼』と仰られしを、
御いらへも候はざりしほとに、『あなむさんや。はやさかりにけ
る』と御敷候しかは、しなの平賀四郎との、佐殿にたつねあひ参ら
せ、をのゝ宿にておひつきまいらせ給ひて候へは、督殿にもうれ
しけにて、『いかに頼頼、なとさかりたりけるぞ』とおほせ候しか
は、『多ん路をよすからうちて候ほとに、馬ねふりをして候ける。
しのはらの堤にて人こゑあまたしてどよみかけ候ほとに、めをみあ
(32ウ)けて候へは、おとこ四、五十人頼朝をとりこめ、馬のくつ
はにとりつき候つるを、まつ馬の口をとりて候ものゝかうへをざり
わり候。今一人くるをはうてを打おとし候し程に、太刀かけに驚
て馬かつと出候し程に、残の者ともはけちらし候ぬ。かやうに候し
間、かり武者なれはにけ去候間、かけやふりて参りて候』と御申候
し間、督殿うれしけにて、『おとななりとも、よからん兵こそかう
は有へけれ。ましてこくわんしやか身にはよくそふる(33才)まい
たる』とほめ申され候し。ふはの関をはきふくかためて候よし聞召
候ほとに、しんさんに分入、雪ふり積ほとに御馬をは乗すて、木の
ねなとにとりつき、けんそを過させをします間、兵衛佐殿御馬に
てこそをとなをなしやうにもをはしませ、かちにてかなはせ給は

す、御さかり候しを、督殿深雪のうちにやすらはせ給ひて、『兵衛佐々々』と仰られ候しに、御いらへもなかりし程に、『あなむさんや。さかりにける。(33ウ) 人にやいけとられんすらん』とて、御なみたをなかせ給ひしときは、みな／＼そてをしほりて候しか。鎌倉の御曹子をまねきまいらせ給ひて、『わ君は信濃へくたりて、山道よりせめのほれ。義朝は東国へ下り、海道よりせめのほらんするぞ』と仰られ候しかは、悪源太とのほひたのかたへとて、たゞ御一しよ山の根につきて落させ給ひ候し。美濃国あふはかのしゆくに大井と申うくん、督殿のとし比の御やと(34オ)のあるしなり。其腹に姫君一人まします。此家へつかせ給ふ。鎌田兵衛いまやう□^(ニ)たひゑんしゆかていに入れば、遊女ともさま／＼にもてなしまいらせ候、其さいちに、さいちのものとも、『このやとに落人こもりたり。さかしとれ』とひしめき候しほとに、督殿、『いかゝすへき』と御誕候しに、佐渡式部太輔殿、『君の御命には重成かはり申さん』とて、督殿のにしきの御直垂をめされ、馬にひらりとりの給ひて、宿より北の山きはへ馳のほりたまひし(34ウ)ほとに、かのしゆくの人々追かけたてまつる。式部大夫殿こかねつくりの太刀をぬきをいはらひ、『をのれらかてにはかゝるまし。我をはたれとおもふ。源氏大將左馬頭義朝なり』と宣て御じかい候し間、ちけの人々、『督殿うちたてまつりたり』とよろこひあへり。督殿は大井かうしろそのくくらやにかくれ給ひけるを、しらざりけるほとに、夜にまきれて督殿、しゆくを出させ給ふ処に、中宮大進殿、りうけこえのたゝかひに(35オ)ひ□^(キ)のふしをいさせ、ふかき雪のうちをかにてにけさせ給ひし程に、いたくはれて一あしものひさせ給はんと覺えす。『いとまをたはせ給へ』と申されしかは、督殿、

『こらへつへくはこらへて、とせよかし』とよにあはれけに仰られしかは、『かなふへしとも覺えす。ゆひかいなきもの、手にかゝらんよりは、御手にかゝり候はん』とて、御頸をのへさせ給ひたりしを、督殿やかてうちをとしまいらせてきぬひきかけ、『大進か(35ウ) あしをやみ候。ふひんにし給へ』とて、いてさせ給ふも哀なり。上総介八郎広経、『人かすあまたにて、路次も難儀たるへし。東国より御上の時、せいをもかたらひまいりあはん』とて、とまりぬ。さてく^(ツ)せ川へ出させ給ひて、『便船』と仰られしにも、ふゐにめされ候ぬ。此舟をくたすほうしは、養老寺の住僧わしのすの玄光なり。督殿をあやしけ^(ニ)見参らせ、『人にしのふ山にてましまさは、かやうの下にかくれ給へ』とて、督殿にも(36オ)鎌田にもこのわらにはもつみたるかやをとりかけ、しよ／＼なんしよを過させ給ふ。さて去年十二月廿九日、尾張国野間のうづみ長田庄司忠宗か宿所へ付給ふ。重代の家人なり。鎌田かしうとなれば、御頼み有もことほりなり。『馬物具なと参らせよ。いそぎとをらん』と御誕候しを、『子とも郎從引具して御とも申さん』とたはかり申、『しはらく御やすみ候へ』とて、ゆとのきよめて入まいらせ、鎌田をもてなすやうにて(36ウ)うち候ぬ。其後忠宗郎等七、八人、御ゆとのへまいり打参らせ候しに、よひによひにうたれたる鎌田をしろしめし候はて、『鎌田はなきか』とたゞ一声仰候しはかりにて、うたれさせをします。此童は御剣をいたきふして候しを、おさなければとおもひてか、目かくるものもなかりしかは、御剣をぬきて督殿うちまいらせて候もの二人やにはきりふせ、同じくは忠宗を打候ははやと庄司か家内へはしり入て候へとも、ぬりこめの(37オ)内へにけ入候しあひた、ちからをよはす、くらをき馬

の候しを打のり罷上候」とそかたりける。ときはは是をきこしめし、「東のかたはたのもしき国なれば、命たにましまさは、音つれ

もあらんと末たのもしく待たれば、又かへらぬ道とさくこそかなしけれ。いかにも湖川へもしつみはてはやとはおもへとも、わか身むなしく成ならは、いとけなき子ともをたればはこくむへぎ。それも猶命をしむにあらすや」とかなしみければ、六歳の(37ウ)おとわか、はゝのかほをみて涙をなかし、「はゝやはゝ、身なけそ。我らかなしからんするに」といとけなきことはいひけるこそ、哀はまさりけれ。金王申けるは、「道すからも君達の御事のみ仰られし程に、此御事をそくきこし召なは、たちしのはせたまふへき御事もなくは、いかなるめをか御覽せん、をさなき御こと御いたはしさに甲斐なき命なからへて参りて候。故督殿くさのかけまての奉公、これまてにて候。今は(38才)出家□て御はたひをこそとふらひ申さんすれ」とて、正月五日の夕くれ、泣々出にけり。「督殿のな(とてはカ)こりとは、此ものはかりこそあれ」とて、家中のなん女泣かなしむこそ理りなれ。同六日、一院は仁和寺の宮より出御あて、八条堀川の皇后宮権大夫顯長亭へ御幸なる。これは三条殿あんしやうのあひた、しはらく御所になるとそきこえし。同七日、尾張国住人長田庄司忠宗・子息先生景宗上洛して、左馬頭義朝のかうべ(38ウ)を持参の由を申す。此忠宗は平太夫朝頼か末葉、賀茂次郎行房か孫、平三宗房か子也。義朝重代の家人たる上、鎌田兵衛かしうとなり。此事京中上下き、をよひ、「忠宗おやかかくひをのこきりにてひかはや」とそにくみける。平大夫判官兼行・宗判官宣房・忠目範守・府生朝忠以下檢非違使八人行むかひ、かうへをうけとり、西のとうるんの大路を三条より近衛までわたして、左の獄門のあふちの木に

そかけ(39才)たりける。いかなるものかしたりけん、下野守たりし事を歌によみてそたてたりける。

下野はきのかみにこそ成にけれよしとも見えぬかけつかさ哉むかし將門かかうへ獄門にかけられたるを、藤六といふうたよみの見て、

將門はこめかみよりそきられけるたはらとうたかはかりことにて

とよみたりければ、此かうへしいとわらひけり。二月(39ウ)にうたれたるかうへ、四月にもちてのほりてかけたるか、五月三日にわらひたりけるをそおそろしき事に申つたへはへりける。「この義朝のかうへもわらひやすらん」と人々申あはせけり。「去保元の合戦には父為義入道をらうとうのはたのにきらせ、わつかに一兩年をたにすこさて、普代のらうとう長田庄司忠宗にうたれぬ。五きやくざいの因果、たちまちにあたりてむけんに落る事、うたかひ有まし。(40才)末世とは申ながら、まのあたりかゝる事有へきか」となかはゝそしり、なかはゝあはれみにける。同十日、世上とうらんによりて、「年号しかるへからず」とて、かいけん有て永暦元年とそ申ける。去年四月に保元を平治とあらためて、たいらにおさまるとかけり。「源氏亡びなん」と才智の人申されしに、源家おほく亡てけるこそふしきなれ。鎌倉の悪源太は近江国石山寺のかたはらに重病におかされてをはしけるを、難波(40ウ)次郎経房き、及てをしよせ、生捕にして六はらへそ参りける。伊東武者景綱をもて、子細をたつねらる。悪源太宣けるは、「故義朝申候しは、『我身は東国へくたりにてむさし・さかみの家人等相催して、かいたうよりせめのはるへし。義平は甲斐・信濃をかたふけて、山道よりせめのほ

れ』と申しあひた、山つたひにひだの国のかたへ落行候しに、よになしもの一、二千人相したかひて候つらん。されとも義朝うたれぬと聞て、みなちり／＼(41才)になりしかは、自害せん事はやすけれとも、平家のしかるへき人を一人なりともねらひて本意をとけんとおもひて、人の下部に身をやつし、馬をひかへて門外にたゝすみ、はきものをとりてくつぬきに近付く事数十度にあまりしかとも、ようちんきひしき間ちからなく、六原にてあやしけに人のみしほとに、かたる中へ下り、程経て又上り、ねらひ候はんと思しに、生捕るゝこそふうんなれ」とそ申されける。伊藤武者申けるは、「源氏の(41ウ)ちやくし、さしも名将にてましますか、たやすくいけとられ給へる事はいかに」と申せは、「それは身の億病にもあらず。雪深き山を数日、或は雨にうたれふゝきに相て身はつかれたるに、此間六原京に有しも、薄衣にして川かせにあたり、食ともしければ身はをとろへ、偏に敵一人をとおもひしはかりを力にて月日を経て過しかは、それより病にをかされ、からかうへきやうなきによて、経房に生捕るゝ也。重病たにもなかり(42才)せは、経房三、四人もねちころしてこそしめへけれ。またく武勇のかけたるにはあらず。うんの尽果る故なり」と申されければ、諸人は是をき、一理り也」とそ申ける。同廿一日午刻に、難波次郎に仰て六条河原にてきられけるとき、悪源太申けるは、「清盛をはしめとして伊勢平氏ほと、ものに覚えぬやつはあらし。保元の合戦のとき、源平両家の者とおほくうたせられしに、夜闇にこそきられしか。弓矢とるみは(42ウ)かたきにもはちをあたへしと、あなちにおもふそかし。さすかに義平程の者を白昼にきるふかくしんやある。運尽て今世にてこそかやうになりはて、情なきめにあひちしよくをはかくと

も、しなは、やかて大まゑんとなるか、さなくは先いかつちとなりて、清盛をはしめとし、なんちらまでも一々にけころしてんす。保元には為朝、高松殿を夜うちにせんと申せしを、もちひられす。今度は義平、清盛か熊野参を追かけて、湯浅、鹿頼辺をは(43才)やりすこさし、しやうゑにて帷鳥子きたらん者ともを手にせんと再三申せしを、殊外なるきんせいなりとて、ようしのはかりことをはすてられ、京家の筆とりのきにしたかはんに、いかてかよかるへき。命のをしさに長物語するにはあらず。はやくひきれ」とて、きられけり。同廿三日、長田庄司父子けんしやうおこなはる。忠宗は壹岐守になる。子は兵衛尉になさる。「忠實ぶそくなり。官ならは左馬頭にもなされ、国をたまはらは義朝(43ウ)あと播磨国か、本国なれば尾張国をたまはりてこそ所存のまゝならめ。義朝不為に陸奥へ下着して貞任・宗任党などをかたらひなは、御大事たるへきに、爰にてうち参らせたるは、はつくんの事なり」などあなちち申せは、筑後守家定、「あはれ、きやつは重代の主君うつふたうしんなり。天下の御ためはしかるへき事なれとも、此者を六条河原にてはつけにして京童ともにみせて後、のこきりにてくひをひかはや。(44才)さうてんの主君と智をまのあたりころして、けんしやうよくほりたるにくさよ」と申せは、清盛のたまひけるは、「さあらむにとりては、朝敵を討てまいらすること有まし」とそ申されける。同二月九日、前兵衛佐頼朝、尾張守頼盛からうとう弥平兵衛尉宗清かためにいけとられて、六原へまいる。宗清尾張国より上りけるか、美濃国あふはかの宿大井かもにとりたり。夜明てみれば、園の竹のうちにあたらしきはか、そとはもたゝぬ有けるを、(44ウ)兼て聞こえありければ、思合てはりおこしてみれば、くひ

のきりたるにむくろ同しくうつみければ、よろこひてほりをこし、くひをもたせて上りけり。是は大井といふゆうくん、あまりにせめとはれて有のまゝに申けるによて、しりけるとそきこえし。兵衛佐頼朝は、去年十二月廿八日、雪深き山を越えかねて父にはをいをくれぬ。爰かこまよひけるほとに、近江国大吉寺と申山寺のそう不便にして、「御堂のしゆしやうもちかつく。(45才)人あつまりてはあしかりなん」とて、彼寺を出て、同じ国あさ井の郡にまよひゆく処に、老翁夫婦有りけるか、あはれみてかくしけり。二月にもなりけり。「さても有へきか。東国のかたへ下りて年比の者ともにもいひ合、したしき者も有かなきかをもせめてきかん」とおもひて、色々の小袖くちはの直垂をはやとのものとらせ、はたこそて一つきと、あるしの子のきたる布小袖細の直垂をき、わらくつはき、ひきりと申ちうたゐの(45ウ)太刀をはすけにてつゝみわきにはさみ、ふはのせきをこえ、せきのほらといふ処につきにけり。大せいうちてのほりけるにはゝかりて、ある藪かけにたちやすらひけるを、弥平兵衛尾張より上りけるか、これをつつけてあやしとてみれば、頼朝なり。うれしとおもひてのりかへにのせてそのほりける。中宮の大進くひをもちてのほりたり。くひをは検非違使うけとりき。兵衛佐頼朝をは、弥平兵衛に預けらる。この兵衛尉な(46才)さけふかきものにて、さま／＼にいたはりもてなしけり。さても義朝の子ともあまた有り。鎌倉の悪源太義平はきられぬ。三男兵衛佐頼朝はめしをかれて、しやうしいまたさたまらず。此外九条院雑仕ときははらに子三人有り。「いとけなけれともみな男子なれば、さてはあらし」など申あへり。ときはこれをきゝて、「我よし朝にをくれてなけくたにかなしきに、此子ともをうしなひなは、片時も命

有へしともお(46ウ)ほえす。叶はぬまでも身をかくさん」と思たち、老たる母にもしらせず、女ともゝあまた有れとも、たのみかたきは人の心なり、それにもましてしらせす、夜にまぎれてまよひいづ。子二人をはあゆませ、をさなき牛若をはいたきつゝ、やるかたもなき心のうち、をしはかられてあはれなり。此年月頼をかけし清水寺へ参り、つやをそしたまひける。おとなしきをさ□のわきにをき、ころものつまをさせ、(47才)いとけなきをはいたき、夜もすかななかせしとそこしらへける心の内こそかなしけれ。さんけいの人々、かたをならへひさをつらねてなみぬたり。きせいのおもむきまち／＼なり。或は有りはてぬ世の中なれとも、すき□ふる事をのみのるもあり。或はよにつかへなから、つかさ位の心になはぬをいのるもあり。されともときは、「三人の子ともか命をたすけ給へ」といひけるほかには他事なし。ときは九歳より月参りをはしめて廿五の年(47ウ)まで、十八日には観音經三十三巻よみて参詣する事をこたらず。「南無大慈大悲の本せいにはちやうごうをもたすけ、枯たる木たにもたちまちに花咲みなるとこそぎけ。千手千眼観自在、三人の子ともたすけ給へ」と祈り申ければ、大慈大悲の御ちかひ御納受ありぬへく、たのもしくを思ひける。暁かたに師のはうへそゆきける。いろ／＼にもてなしけれども、むねふさかりてきゝも入たまはず。日来参詣(48才)の時は、はなやかなる下部うしかいに美麗の衣装をかさりしに、今は人にしのひてさまをやつし、あさましけるけしきに、いとけなき子供引くして泣しほれたる有様、目もあてられず。師もいよくなみたをそなかしける。「雪のはれまゝておはしませかし」と申せば、「御心さしは有かたけれとも、此寺は六原ちかき事なり。今は仏神の御たすけならて

は、又頼かたなし。観音に申させ給へ」と云捨て清水寺をたち出、いつくをさす(48ウ)とおもはねとも、大和路にかゝり、南へむきてそあゆみゆく。比は二月十日の曙なれば、よかんいよくはけしく、風は音羽の山川のなかれはいまたこほりつゝ、道のゆきまもあらぬかうへに、又雪降ぬれば、ゆくへきかたもさらになし。子ともははにすゝめられてあゆめとも、いまたならはぬ事なれば、あしはれ、ちはなかれてそあゆまれぬ。あるときはたふれふし、或時は、「寒やつめたやかなしや／＼」とそこゑ／＼になきさけ(49オ)ひける。母独これをみて、心の内たとへんかたそなかりける。人声のする時は、「すはや、かたきのくるや」とて、きもをけす。ゆきあふ人の、「あはれ」といふも、中々心をかれてそ覚し。ときはあまりの事にや、或小家にやすみて申やう、「なとをのれらは」とはりしらぬそ。此あたりは六はらとて、かたきの在所なり。なくならは、義朝の子とてくひをきらるへし。命をしくは、なくなよ。はらの内の子たにも□る人の子は、おやの云事をは聞そかし。(49ウ)すてに七、八になるそかし」とくときなきければ、八子すこしをとなしければ、母のいさめ事を聞て、なみたをそなかしける。其後はこゑたつるはかりはなかさりけり。六子は猶たふれふし、「寒や／＼」となきかなしむ。ときは、二歳のみとり子をふところにしたきたれば、六子をいたくへきやうなし。てを引てあゆみ行程に、さら／＼みちのはかもゆかす。左馬頭うたれぬとき／＼しより、ゆみつをもさへ(50オ)みさりけり。さるほにあさましけに衰へて、時々心はとを／＼とそなる。いつくへ立しのふへき身とも覺ねとも、子どもの事のかなしさに、足にまかせてまよひけり。また夜をこめて清水寺をいて、春の日なかしといへとも、ゆきもやらす、とか

くする程に、日は入逢のかねのこゑ聞さへつらくて、伏見の里に着にけり。日暮夜になれとも、立よるへきかたなし。山のかげのゝへんに人さとすこしみゆれとも、「かたきにてや(50ウ)有らん、六はらの家人などの家にもこそあるらめ」と色々におもへは、心易くやとかりぬへき思もなし。「かゝるうき人の子の母となりて、うき思ひをする事よ」とおもひけるか、またおもひ返しておもふやう、「をろかなる心かな。かやうにまよひありきてしつかならねはこそ、後の世をとふらはね。ともにちぎればこそ子とも、あれ、ひとりのかになしけるはかなさよ。けふはひめむすあゆみつかれたるようちの者とも□うへをも(51オ)やすめすは、いかにしてあすの道をはゆくへき。やとをかりえすは、野にもやとまるへき。野山にこそおそろしきものはおほかななれ。おたしくあけん事もかたかるへし」とおもふもことはり也。路とうのおとろか下に親子四人、手に手をととりくみなぎるたり。たそかれ時もすぎぬれば、ゆきかふ人もあたたえて、ところ／＼にはる／＼みえし家も扉をもちぬらんと心ほそし。里のけふりも今はたえぬれば、やとからは(51ウ)やのあらましたにもなし。夜も更行は、風あらく雪ふりそひて、子とももときはもあすを待へきいのちとも覺す。「あはれ、人のしなをも見しらざらん山里のくさの庵もかな。せめて今夜はかりの身をもかくし、子共をもたすけはや」と思ひける。いとけなきものともはなきよはり、いきもたえ入やうに有しかは、「かやうならば、いづれもたすかりかたし。なからふましき身なれば、たゝ人里に宿をかりてこそしやのたのみもあれ」と(52オ)おもひなして、たく火のかけをしる□にておつ／＼ちかつきよりて竹の扉をうちたけは、あるしとおほしきにうほう、戸をあけて出たりける。ときはをみ

てあやしけにうちまほり、「いかなる人にてましますや。なとかひくしき人をはめしくせられぬぞ。しかもをさなき人々引くし奉りて、此雪ふかく風はけしきに、いつくへとてをはしますぞ」ときは、「されはとよ。あまりにとしころおとこのうき心有にて、うらめし(52ウ)さのあまりに子とも引くし出たれば、雪さへふかくふり積りて、道ふみまよふかなしきよ。宿かし給へ」とて、しほくとしたるけしきにて心はかりはしのへとも、余るなみたは袖にそ落ける。あるし、「されはこそあやしかりつる。只人にあらず。かゝるみたれの世になれば、しかるへき北のかたさまにてそをはすらむ。ゆくゑもしらぬ人ゆへに、老たる賤のめの六原へめしわたされてなわをも付られ、命うしなふほとめにはあふと□(も)いかて(53オ)か追出し申へき。此里のならひなれば、たれ人かうら／＼と一夜の御やとをも申へき。爰をかなふましと申ならは、山にこそをはしませんが。是ほとにさむくたえかたきに、あすまでいかゝなからへ給ふへき。此屋へおほしよるも一樹のかげのやとり、他生の御縁、御ちきりにてこそあふらふらん。見くるしけれとも、いらせ給へ」とて、急ぎまねきいたてまつり、あたらしきむしろとり出ししかせ奉り、たき火してあて奉るこそやさしけれ。さてほと(53ウ)へててこそすめけれ。ときはむねうちふたかりてすこしもみす。子ともにはすかしにくわせけり。ときはものくわぬ事あるし心くるしくおもひて、いろ／＼にとりいて、「これはいかに、あれは」など申てなくさめければ、たゞ事ともさらに覚えす。とし比たのみ奉りし清水寺の観音の御哀みなる也と、ゆくすゑもたのもしくこそおもひけれ。六子はあゆみつかれて何心もなくはゝのそはにふしたりける。八子はち、義朝のわかれを(54オ)わす

れす、うちとけまところむ事なし。つねはかへにむかひゐて、しのひ／＼そなきにける。よも更行、人もしつまりぬれば、母八子かみにさゝやきいふやう、「あなむさんの者どもの有さまや。世に有人は十人廿人の子をもそたつるをかし。をくれさきたつうき世のならひとはいひながら、をなしたけもろしらかまでもそひ／＼てのちかきりあれば、二しんのあとをとふらふも有そかし。をのれらを三人持たるか、せめてひとりもそひてよかし。(54ウ)あすはいかなるものゝ手にかゝりて、なにといふめにかあはんすらん。水にやしつめられん、山にやすてられんすらん、つちにやうつまれんすらん。母とて我をたのまん事もはこくまん事も、あくるをまつ程そかし」と泣々かきくときければ、八歳の子申やう、「扱我しなは、母は何となるへきそや」、はゝ、「をのれらをさきたて、一日へんしも有へき道ならはやもろともにこそしなんすれ」といへは、八子、「我にはなれしとて、母もつれてしなんこと(55オ)こそうれしけれ。母たにもそひては、命はをしからず」といひて、かほに貌をあて手にてをとらへなきければ、いとゝたに春の夜は夢みるほともなきならひなれば、やかてあくへきに、おもひ有身にはあかしかね、曉の空をまつ程に、八声の鳥もしきりにてら／＼のかねもきこえけり。よもはやほの／＼と明ゆけは、ときわ子ともをすかしおこし、いてなんとしけるに、あるしいそきてゝとりとめけり。「けふはかくておさなき人々の足をもやす(55ウ)め参らせ、雪はれて後、いつかたへも御出候へ」とあなかに申ければ、名残をしかるへきみやこなれとも、子とものためにはうきかたなれば立わかれ、あたりもとをく落行はやおもへとも、あるし情ふかくしてとめければ、けふもわらやのたかすかき、伏見の里にそ暮しける。

程なくよはも明ければ、子とも引くしていとまをこひ、ふしみの里をいてぬれば、あるしの女さゝやき申けるは、「いかなる人にてましませは、かくふかく（56才）しのはせ給ふらん。みやこちかき此里にしはらくもとゝめ申さん事、しせんのも有ならは、中々なることなるへし。一めもしらぬ御事に一夜の宿を申て、うわのそらに心をくたくよしなさよ。もし御心やすき御事に落つかせましゝて有ならは、いやしき身にては候へとも、御たつねはへるへし」とて、なみたをなかすそやしき。ときはもさきの世にていかなるえんをむすひて、かゝる情に預るらんとおもひ、「命の有らんかきりは、（56ウ）此心さしいかてか忘るへき」なとこまゝと悦び、泣々別出にけり。さて道すからみる物あわれみ情をかけて、馬よりをりて送ものもあり。かちなるものもみすこさす、子ともをおいなとして五町十町をくる程に、思の外に大和国うたの郡に着にけり。ちかきものとの有けるに尋あひて、「子ともか命をたすけんとして、各をたのみて迷ひくたれり」と申せは、此世中をはゝかりて、「いかゝあるへき」としめは申あひしかとも、「女の身に（57才）てはるゝたのみくる心さし、むなしくなさんもふひんなり」とて、さまゝにいたはりける程に、すゑの世までの事はしらす、いまは心やすくそ成にける。

平治物語下

兵衛佐頼朝は弥平兵衛かもとに預けられて有りけるか、立居につけてのふるまひ、常の少者にも似ず、おとなしやかなるをみて、人ごとにしたすけはやとそ申あひける。有人兵衛佐にひそかに告申けるは、「御身の落居、池殿に付奉り御申あらは、御命はたすかり給は

んするなり。池殿と申は大式清盛の継母、尾張守頼盛母儀、忠盛の後室たる間、人々おもく思ひ奉る」と（1才）申せは、頼朝内々申されたりければ、池殿むかしより人の歎を憐み給ふ人にて、「あなむさんやな」とて、清盛嫡男重盛、今度くんこうに伊与守になり、今年正月に左馬頭になられたりけるを、招奉て仰けるは、「兵衛佐といふ十二、三の者かくひきられん事のむさんさよ。頼朝一人はかりをはたすけさせ給へかしと、大式殿に申て給候へ」と有ければ、「畏て候」とて、此由大式殿に申されければ、清盛宣けるは、「池殿のまし（1ウ）ますをは、故刑部卿のことくにこそ思ひ奉れ。然間、火をも水とも何事も背申さしとこそ存すれとも、この事こそなんきなれ。ふしみの源中納言・越後中将などのやうの者は、なん十人ゆるしてもくるしからず。かの頼朝は六孫王の末葉には正嫡なり。父義朝ほとの名将もみる処や有りけん、数輩の兄を超越せり。合戦の時もはしたなきふるまひしたるとこそぎ。遠国になかしをくへき者とは覺す」とて、分明なる返し（2才）もなし。重盛池殿に此由申ければ、池殿仰けるは、「大式殿力をもて度々のらんをしつめ、君をまもり奉る間、平家ははんしやうし、源氏は不儀なるによてことゝく亡ぬ。頼朝一人たすけをかれて侍とも、何ほとこの事をし出し候へき。先世に頼朝にたすけられて候けるやらん、余りにゝ不便に覺候をや。又それにつき奉て申も、使からのたよりもやと頼み奉る。大式殿も尼か身をはけぬはかり也。一門をはこくみ給へは、大事にも（2ウ）いとをしくも思ひ奉る事、頼盛いくたりにか思替へ申へき。其心さしをは、さりとも見給ひつらん。若そなたにや、母にあらずとへたて給ふらんとまでよにうらめしき事」と打なみたくたまひけり。擬此子細を父の清盛に申され

けるは、「池殿のうらみ以外に□。女房のはかなき事おもひ立ぬるは、なんき極なき事なり。さのみそむき申されん事、うたてしく候はんすらん」と申されければ、大武殿聞たまひて、「大事を仰かけらるゝ人かな」と、(3才) 事外の返事もなかりけり。池殿是に力をえて、重盛に我子の尾張守頼盛をさしそへて、打かへく歎給へは、「兵衛佐明日きらるへし、今日きらるへし」などさた有しかとも、延てきられす。去程に頼朝心におもひけるは、「併八幡大菩薩の御たすけなり。命たにもたすかりなは、いかてか本意をとけさるへき」と思ひけるこそおそろしけれ。兵衛佐、「一日も命の有時、父のためにそとをつくらはや」と宣けれど、木もなし、刀もゆるされぬ(3ウ)は、おもふばかりなりけるに、池殿候人丹後藤三頼兼といふもの、此心さしをいとをしくおもひて、杉檜にて応につくりあつて奉る。兵衛佐かきりなく悦で、梵字と覺しき物をかきまなひ、其下にあみだの名号をかきて数百本そと□をつかね、「あはれ、わらわへともにとりちらされず、牛馬にもふませさらん所に置いて奉らはや」と有しかは、藤三「給て置奉らん」とて、六波羅に満功徳院といふ古寺有、その庭の小しまにをかんとして、さしもは(4才)けしき夜寒にはたかになりて、卒都婆をはもとりにむすひ付て、およきはたりて置いてけり。「兵衛佐をかやうに藤三かあたるも、しかしなから池殿の御心のすへなり」とそおもはれけり。大草香の皇子の御子まゆほの大君は、七歳にて継父安康天皇をほろほし奉り、貞任子千代童子は、十三の年甲冑をよろひ、たてのおもてに願れて、よく矢をいてかたきをとる。弓矢の道はおさなきにもよらす。昔の人はかうこそ有しか。(4ウ)兵衛佐無下なり。父うたれは、打死か自害かをこそすへきに、尼公に付て命をたすからんと

申。いひかひなき事也」と上下申あへり。有もの申は、「やことなき名将男子といふとも、たれ命をしまさる。其上漢家のむかしを思ふに、越王勾踐と呉王夫差と合戦せしに、越王たゝかひまけて呉王のために生とられぬ。越王呉につかへし事、年来のほくしうにこえたり。呉王此心さしをかんして越王をうたせす。呉の臣下に伍子胥と云忠臣(5才)有り。『越王を誅せずは、此国亡なん』といさむ。呉王きかず。呉子胥しひていさめしかは、呉王いかりて伍子胥をきる。伍子胥誅せられし時に、『我眼をぬきて呉王の門にかけよ。越王おこりて此国をほろほさんをみん』といひて、つゝにきられぬ。其後戦をおこし、呉国をせむ。くわいけいさんといふ所にてはちをきよめんといふ事有とこそ、頼朝は思ふらめ。尼にもつけ法師にもつけ、彼所存こそ知かたけれ。おそろし」とそ申ける。偕(5ウ)九条雑仕常葉はらの子とも三人有。みな男子なれば、たゝ置かたしとの六波羅より兵をさしつかはし尋けれども、常葉も子とも、なし。常葉か老母の尼はかりそ有ける。「むすめ孫のゆくゑしらぬことはあらし」とて、六はらへめし出し尋らる。尼公申けるは、「左馬頭うたれぬと聞しより、子共三人引具して行かたしらす」と申ければ、「いかてかしらさるへき」とて、さま／＼のがうもんにをよふ。彼尼へんし暇有とき申けるは、「我六拾に(6才)あまる老の身なり。ことゆへなくすこととも、いく程の哀か有へき。三人の孫いまた十歳にたにならさるなり。もしことゆへなくありへは、すゑはるかなるへし。けふあすをたにもしらぬ老の身をおしみて、末はるかなる三人の孫ともの命をいかてうしなふへき。たとひ行かたをしりたりとも申し。まして夢にもしらす」とそ申ける。常葉やまにて此事をつたへきとて、「我子をおもふやうにこそ、母も

我をはかなしむらめ。我ゆへに苦をうけ給ふ（6ウ）と聞ながら、いかてか出てたすけさるへき。先世のくわほうつたなくて義朝の子と生れ、父かとかの子にかゝりてうしなはれんは、其ことはりも有ぬへし。ゆへもなき我母のうきめをみる事こそ、さながらわかとかなれ。子ほしくは、ゆかりの人の子をやしなひてもなくさみぬへし。無量劫を送りてもあわさんなるは、おやこの中のわかれなり。もしせめころされても有ならは、くやしきともかひあらし。はゝの此世に有時、いてゝたすけん」とおもひて、（7オ）三人の子共引

くして古郷^{ふるきやう}へのほり、もとの住家に立入てみれば、たておさめて人もなし。あたりの人にちかつきて、「御年よりは」ととへは、「ひとひ六はらへめされさせ給ひてより、下さまの人はにけうせて、かやうにあさましくならせ給ひて侍なり」とこたへければ、「されはけに」とて、今も又尽せぬものは涙なり。さて常葉九条院へ参り、なく／＼申けるは、「女の心のはかなきは、つゐにはのかれましき物を、もしやと此子ともかむさんさに、へんしも身（7ウ）にそへてや侍とて、いとけなきを引くしてかたほとりに立忍びて侍つるか、行衆もしらぬ老の母を六はらへめされて、さま／＼いましめとはるゝよし承侍は、子ともかことは何ともなり候へ。母の苦をたにとゝめ候はゝと思て、相具して参り候」と申ければ、御所をはしめ奉り、有はとの女房達、皆なみたをそなかされける。「よのつねの女房の心ならは、『老たる母は今日をまため命なり。はかなくなるならは、後世をこそとふらはめ。行末遠（8オ）き子ともをたすけん』とおもふへきに、『子をみな／＼うしなふとも、母ひとりたすけん』と申心さしの有かたさよ。仏神さためて御憐^{あはれ}みあらんすらん。子ともとり／＼なるかほはせ也。年比この御所へ参るとは、

人みなしりて有ものなり」とて、「しんしやうに出たゝせ給て、出し給へ」と人々申されければ、中宮もさこそとて、親子四人きよけにしやうそかせ、車ざうしきのしんしやうなるに出たゝせ、六はらへこそつかはされ（8ウ）けれ。さて九条院をいて、河原を東へやり行は、ころもをぬけとはいはねとも、さんつ川をわたる心ちして、すてに六はらへもちかくなれば、さながら十王さんたんにむかふ心ちす。ひつしのあゆみちかつくこと、我身なりけりとあはれなり。六はらへいたりければ、伊藤武者景綱に預られにけり。常葉申けるは、「女の心のはかなきは、此子共もしやたすかるとて、かた田舎へ引くして下しかとも、科もなき母のめししたされてはちを見、苦を（9オ）うけ侍よし承て、子ともをこそうしなひ侍共、母をいかてかたすけ候はて侍へきとおもひさため候て、御尋侍る子とも相具して参り候うへは、母をはとく／＼御ゆるされ、我か身には母にかゝらん一筋の縄を百筋かけられ、十の指を十日にもかせ給ふとも、おもひきりて参たる常葉なれば、いたむへき身にあらす。母をとく／＼ゆるさせおはしませ」と泣々申ければ、聞人かう／＼の心さしをかんして、あやしの下部までも（9ウ）涙をなかしける。さて景綱此由を清盛に申ければ、母をはゆるされけり。母は景綱が宿所へきてむすめ孫ともを見て、たえ入はかりなり。母はるかに有ておきあかり、常葉のかほをつく／＼と見て、「あなうらめしの心つかひや。老たる我みはともいくほとならぬ事なれば、態とも身に替、孫共をもたすけたけれ。何にしに子共をはくして出て、我に憂目をはみせ給ふぞ。常葉を二度みる事はうれしけれ共、孫とものはかなく（10オ）らむ事こそかなしけれ」とて、手にてをとりてかほにあてゝ、ふししつむこそ哀なれ。さて清盛とき葉をめし出され

ければ、六子、八歳の子さうのひさに居たり。二歳の牛若はふところ
に有。常葉泣々申けるは、「左馬頭つまふかき身にて、其子共みな
うしなはれんを、ひとりもたすけさせ給へと申さはこそ、其理りを
しらぬ身にても待らめ。もし一人もたすからは、たすけさせおはし
ませ。又ふかき湖底のみくつ共（10ウ）成へきならば、先此みをう
しなはせ給へと申さんを、なとかきかせ給はさるへき。高も賤も
おやの子をおもふやみは、誰もさこそ候へき。此子ともにわかれ
ては、片時もたへて有へしとも覚え待らね。我らわをうしなはせ給ひ
て後、子共は御はからひ候へ。此心さしを申さんにこそ、左馬頭
草のかけにはちをみせて、かゝるうき有様を見えまいらせ、是まで
参り侍れ。此世の御情^{おきせ}後の世の功德^{くどく}なるへし」なとさま／＼に申
せは、六歳の（11オ）子母のかほをみて、よにも頼もしけに思ひ
て、「なかくてよく申てたへや」とこさかく宣ひければ、今までは
心つよけにおはしけるか、「^{（けか）}なけなるものゝことはかな」とて、
しきりに涙をなかさされければ、座になみ居たる清盛の郎等とも、涙
をなかし袖をしほらぬはなかりけり。常葉は生年廿三なり。貴所の
官女にて物なれたるうへ、おもひはむねにあれと、ことは口にみ
ちて、武きものゝ心にも哀とおもふはかり申つけ、青きまゆすみ
（11ウ）ふかき涙に乱れ、なけき日数をへて、その人ともなくやせ
をとろへたれとも、猶よのつねの人にはこえたり。見る人、是をあ
はれますといふ事なし。「是ほとと美女をいた見す、聞す」とそ
申あひける。有人申けるは、「よきこそとはりなれ。大宮左大臣
伊通公の、中宮の御所へみめよき女をまいらせんとて、よきときこ
ゆる程の女を九重のうちより千人めされて百人えらみ、百人のうち
を十人えらみ、十人の中^{（なか）}一人とて、此常（12オ）葉をまいらせた

りしかは、よきこそ道理なれ。されはにや、みれとも／＼いやめつ
らなるかほはせ也。唐^{（たう）}の楊貴妃^{（やうきけい）}・かんの李夫人^{（りふじん）}も是には過し」と
たとへを引て申ける人こそおほかりけれ。常葉は景綱か宿所へかへ
りぬ。其後はあらき足音の聞ゆるも、「いまやわが子ともうしなひ
にくるらん」と肝^{（きん）}魂^{（たま）}もみにそはす。母は子共かかほをいつ迄とま
もり、なく子ともは又たのもしからぬ母を頼てあしてに取付、みあ
けみをろすさま、目もあてられす。（12ウ）清盛宣ひけるは、「義朝
子共の事、私にはからふへきにあらす。勅^{（ちく）}詔^{（みこと）}にまかすへきなり。
天氣にこそよらめ」とのたまひければ、六はらの人々、「かやうに
御心よはき事をは仰られ候ぞ。此おさなき者共三人かおひたちな
は、末の世にいかなる御大事をか引出し候はんすらん。子孫の御た
め、しかるへからさる」よしめん／＼にいさむれば、「誰もさこそ
と思へとも、おとなしき兵衛佐を池殿たすけんと申さるゝうへは、
成人の頼朝をはたすけて、いとけなきを（13オ）又きらん事、さか
さまこと後代のあさけりなるへし。ともかくも頼朝か死生によるへ
し」とそ宣ける。かの人々の命^{（いのち）}、一日片時も有こそふしきなれ。こ
れしかしなから年月憑^{（よ）}奉^{（ほう）}りたる清水寺の観自在の御たすけといよ
／＼たのもしくて、わかみは観音経^{（くわんおんきやう）}をよみ、子共には観音の御名を
をしへて唱へさするを哀なる。かくて兵衛佐の死罪の事、やう／＼
に池殿申されけるによて、ゆるされて流罪にそなされける。是併八
幡大菩薩の（13ウ）御はからひなりと、敬信^{（けいしん）}弥きはまりなし。頼朝
は東国伊豆国へなかさるへしとさたまりけり。まして常葉子共いつ
れもようせうなれば、たすかりせんとはさたあれとも、猶
も心ほそさまなりけるか、是も死罪をはなためられける。二月廿
日、院は八条堀川の皇居宮の権大夫頭長卿の宿所^{（しゆくしよ）}棧敷^{（せきしき）}に常に出御あ

て、四方の山辺の霞わたる夕あけほの、けしきをゑいらんあて、御なくさみ有けるを、内裏より（14才）御使とて、かの棧敷を打付けり。上皇御いきとをりふかくして、清盛をめしめて、「主上若年にましませは、是ほと御はからひ有へし共おほえす。これ併経宗・惟方かわさなり。めしいましめよ」と仰くたされければ、清盛勅定（を力）にうけて申されけるは、「保元には御方へまいりて忠をつくし候ぬ。去年の合戦にもしんみやうをおします忠節をいたし、乱世をつめぬ。なんとも勅命にしたかひ奉るへし」とて退出し、経宗・惟方（14才）兩人の宿所へらうとう共をさしつかはす。新大納言のものとには、うたのすけ道信・前の武者所信安二人うちしにす。経宗・惟方めしとりて、御坪内に引すゑたり。すてに死罪にさためられけるを、法姓寺大殿御申有けるは、「嵯峨の天皇の御宇、右衛門督仲成か誅せられてよりこのかた、死罪をとめられて年久しかりしを、保元の乱に少納言入道信西ほとの人、あやまりて死罪を申おこなふ。中二年有て去年、逆乱お（15才）これり。死罪をおこなへは兵乱たえせぬ本文、たちまちにあらはれたり。公卿のくひをさうなくされん事、いかゝ有へからんとおほえ候。遠流にしよせられ候へかし。遠流は二度かへらす。死罪に同じと承候」とぞ申されける。此大殿は大織冠よりこのかた、代々君の御うしろみとしてせんせいをのみ申さた有しかは、代も又人もなくめてたくまします。御しそんはんゑいもさこそと諸人ほうひ申けり。かくて少納言入道信西子共そうそく（15才）十二人、国々へなかしをかれたりけるを、めん／＼に召出さる。是に付ても紀伊二位の心の中こそいとをしけれ。権をあらそひし信頼は誅せられぬ。故入道も命にあらましかは、いかなる国よりも帰らまし。数輩の子共召帰さるゝを聞ても、

後の世のわかれをこそなけきけれ。上皇も御まつり事のたひことには仰あはせらるゝかたもなきまゝに、信西をのみ忍びおほしめしける。新大納言経宗は阿波国へ、別当惟方は出家すと（16才）聞る。長門国へなかざる。伏見源中納言師仲卿は内侍所とりとめまいらせたりける間、信頼・同の重科はなためられてける。さりながら都のうちにをかれん事、いかゝと諸卿一同に申されけり。播磨中将のめしかへされたる下野国むろの八しまへなかされける。三河の八橋を渡るとて、かうそくちすさみける。

夢にたにかゝる三河の八はしを渡るへしとはおもひやはせし上皇此歌を（16才）きこしめされて、急めしかへされてけり。新大納言経宗は阿波国より召帰され右大臣迄へあかり、後には阿波の大臣とぞ申ける。大みや左大臣伊通公の申されけるは、「世にすめは、をかき事をもきくものかな。昔こそ我朝にきひの大臣は有けんなれ。又粟の大臣出きたり。いつかひ多の大臣出こんすらん」とそのたまひける。大臣大饗おこなはんとて、伊通公をそんじやにしやうし申されけるに、使者のきくにもはゝからず、「粟の大臣（17才）帰洛して、はたこふるまひするに参るまし」とぞ宣ける。是をも例の御事とぞ笑ける。別当入道をは、猶御いきとをりふかくしてめし帰さるましき由きえければ、心ほそくやおもはれけん、御所の女房たちの御中へ消息を奉りけるおくに、

此世にもしつむとききは涙川なかれしよりもぬるゝ袖かな女房達御所に此歌をもてはやし申されたりければ、君もあはれに思召てめし帰されてけり。さて（17才）兵衛佐は死罪のこと、池殿のやう／＼に御申有ければなためられ、伊豆国へそなかされける。池殿兵衛佐をちかつけ仰られけるは、「昨日までは其事ゆへに心を

くたきつるに、けふすてに悦になりて伊豆国へとかやなかさるとな
ん。尼公か若かりし時より、人のうれへ哀をきゝてはたえ忍ひかた
き心有て、おほくの者の命をたすけ、くびをつきてさふらふなり。
今はかゝるくち尼の申事もみゝなれて、大武殿よもきかしと覚え
(18オ)しかとも、もしやとり申たれば、死罪とかやをなためら
れぬ。尼か命のうちに是程の悦、又有へしもおほえす」と宣へ
は、兵衛佐おとなしやかに、「御恩にて命をたすけられまいらせ
ぬ。この芳志生々世々にも、いかてほうし申へき。道にても国にて
もうきめを見え候とも、何のうらみか候へき。たゝはる／＼と罷下
候はんするに、召つかふもの一人もなく、旅のそらくこそ心くるし
く覚え候へ」と申されければ、池殿、「それはさそおもひ給候はん。
(18ウ)父伯父の時よりも召仕し人はおほくこそ侍つらん。世にを
それてこそ出さるらん。とがをなためられぬ披露せは、なとか年比
のものともきたらさるへき」と仰られければ、兵衛佐弥平兵衛に申
合て披露しければ、さふらひ下人七、八十人を出来る。其うちに侍
は三十余人なり。此侍共同心に申けるは、「哀御出家あて、池殿に
御心やすく見えまいらせて、伊豆国へも御下候へかし」と申けれ
は、其中に広結源五守安はかりそ、「いかに(19オ)人申ともそら
きかすして、御もととりををしませ給へ」とみゝに申ける。有とき
守安申けるは、「千人の中の一人と御身のたすからせ給は、たゝこ
とにては候はし。氏神八幡大菩薩の御はからひにこそ候らめ」と申
せは、「もととりきり給へ」とたひ／＼申せとも、返事もせず。「な
きらせ給ひそ」といふをも音もせず。心中いかゝとをそろしくそ覺
えける。永暦元年三月廿日、頼朝伊豆国へくたさるへしと聞えけれ
は、池殿へ暇申にまいりける。池殿すたれ(19ウ)をかゝけて御覽

して、ちか／＼とめされ、つく／＼とまもり給ひ、「かやうに有か
たき命をたすけ申うへは、尼かことはを露ほともちかへ給ふな。ゆ
みや太刀かたなといふものを目にも見給ふな。まして手にもとるへ
からす。狩すなとり、おもひよるましき也。人の口はさかなき事
にて候へは、何かとさんけんにあひて、うき事を尼か一期のうちにふ
たゝひきかせ給ふなよ。其身も二たひかやうのめに相奉らん事、口
惜かるへし。いかなる先世のしゆくごう(20オ)やらん、おやこな
らぬ人ゆへに是程いとをししく思ふらん。人のなけきをうけとりて心
をくるしむる事よ」となき給へは、兵衛佐は生年十三の春なり。よ
うちの人なれと、御心さしのせつたるを思ひしりて涙にむせひ、か
ほをももちあけす。ほとへて涙をおさへ申されけるは、「よりとも
去年三月一日、母にをくれ、今年正月三日、父にわかれ候あひた、
身なしこに成て哀む人も候はぬに、かやうに御たすけ候へは、をそ
れなる事に候へとも、父とも母共(20ウ)このかたをこそたのみ申
候はんすれ」とて、さめ／＼となきければ、池殿、「実にさこそあ
らめ」とて、又なみたをそなかされける。「人はみな父母のために
けうやうの心さしふかければ、冥加も有、命ものひさふらふなり。
経をもよみ念仏をも申て、父母の跡をとふらひたまふへし。尼か子
に右馬頭家盛とて侍しか、其ようちなりし佛おもひ出ていとをし
く思そめたりしか。鳥羽院にめじ仕、けんせいならひかなかりし
に、此大式いまた中務(21オ)少輔にて有し時、祇園社にておこを
引出し、山門の大衆にうつたへられ遠流せらるへかりしを、君おほ
しめしはつらひ給ひしかは、『清盛流罪のちゝするは弟の家成かさ
ゝ申ゆへなり』とて、さま／＼にしゆそするときこえしかは、山
王の御たゝりとて、廿三の年うせ給ひしそかし。家盛にをくれて一

日片時も此世に有へし共おもはざりしかとも、こそよことしよと暮しつれば、はや十一年になり侍る。きのふまで其事に又こゝろ（21ウ）くるしかりしに、けふよりは涙のたゆむ袖ともなりて侍そ。行糸はる／＼のその身にたまし／＼ければ、めしかへさるゝ事も侍へし。あすをもしらぬ老のみは、それも侍へきことになし。是こそさいこよとおもへは、名残のをしき」とて、又うちなき給へは、兵衛佐もいとゝなみたそなかしける。永暦元年（（俗字））三月廿日の晩、六はらを出て東路はるかにおもむきけり。伴の者ともあまた有けれども、爰にてはきものつくりひ、かしこにて人に（22オ）物いふよしにてとまりければ、誠したかひつきける者三、四人には過す。広結源五守安はかりそ馬くら旅のくそくしんしやうにて、大津までとて伴しける。兵衛佐、「いくらも見えつる者ともは、何とて見えぬぞ」とのたまへは、守安申けるは、「れうゑんのさかひへ下り候へは、或は妻子或は父母の名残ををしみて、遅参候らん」と申けれども、一人も参り候はす。皆人はなかさるゝをなけゝとも、頼朝は悦けり。ことほりや、さるゝへきか（22ウ）なかさるゝ間、悦も道理也。されとも久敷住なれし都なれば、名残をしきや思はれけん、馬をとこ／＼にひかへ、都のかたをそかへりみし。内蔵人にて有しかは、雲の上人のましはりもおもひ出、きさいのみやのみやつかさにても有しかは、その名残も忘れず。「父にも母にもよしみおはせぬ池殿にたすけられ奉りける。心さしの程の有かたき人をも見奉らん事も有かたし」とおもひつゝけて、かたきの陣の六はらさへ名残をしきてそ（23オ）おもはれける。胡馬北風にいふ、越鳥南枝に巣く。ちくるいの心なきたにも、古郷を忍ぶおもひ有り。東平王といひし人、旅にてはかなくなりしかは、其つかのうへの草木も

も古里のかたへなひきける。遊子は神と成てちまたを過る人を守り、杜宇は鳥となりて旅なる者をかへれとなく。これら長生（（俗字））に命をうしなひ、他郷にかはねをとめしかは、魂うかれて外土の恨をあらはせしたくひなり。兵衛佐の心もさこそと（23ウ）ほえて哀なり。追立官人青侍季道なり。粟田口辺より路次にあふものをうばひとる。兵衛佐のたまふやう、「頼朝下向の時狼籍有ときこへん事をんひんならず」とせいせらる。広結源五、「いつくまで御とも申へき。八しゆんにあまる老母を持て候か、けふともあすとおほえぬみなり。守安にはかるゝ事をあまり／＼なけき候。いかにも成候は、見をき候て罷下奉公申へし。せめてせたまで」とて、供しけり。勢多をは舟にて渡り（24オ）けり。「かしこの杉むらにとりのみゆる。いかなる神にてまします」ととへは、守安、「勢多は近江のこうにて、国中の神をいはひ奉る」と申せは、「御名をは何の神と申ぞ」ととひ給へは、「たけへの社」と申。兵衛佐、「今夜はあの社にとゝまらん」とのたまへは、守安、「宿に御とまり候へ」と申。頼朝、「行すゑいのり申さんために社頭に通夜申度」とて、彼社へ参り給ふ。夜更下へねいりたるとき、守安兵衛佐に申けるは、「都にて御出家有ましきよしを申候しは、（24ウ）全守安かことにはも候はす、八幡大菩薩の御たくせんなり。其故はみやこにてふしきのれいむをみたてまつりき。君はしやうゑあたてあほしにて石清水へ御さんけい、守安御とも申て候しに、君は神殿の大床にまします。守安はみつかきのきはに伺候す。御とし十二、三はかりなる天童、弓矢をいたきて大床に立たまひつるか、『義朝か弓矢なくは、めして参りて候』と申されければ、よにけたかき御声にて、『ふかくおさめをつけてをけ。（25オ）終には頼朝にたまはん』とそ仰ら

れける。『先そのほと頼朝に食せよ』とて、天童御篇のきはへ参りて出されたるものを、又いたきて君の御前に置給ふ。何ものそとみれば、のしたる鮑アビ六十六本なり。さきのことくなる御声にて、『頼朝、それよたへよ』と仰られしかは、御手にかいにきりてひろき所を三口まいりて、ほそき所をは守安になけて給候しを、懷中して如法々々とするこふと見奉りて夢覺ぬ。此夢を心(25ウ)のうちに合候やうは、御当家の弓矢をは大菩薩御ほうせんにおさめられ候ける。督殿一たんでうてきとなり給ひて亡ひさせ給へは、君の御ためは御ゆくすゑもたのもしき夢なり。六十六本の鮑は、六十六ヶ国を掌タナににきらせ給ふへきさうなり。まいるのこしを賜て懷中すとみたてまつりて候へは、人数ならぬ我等までもたのもしきこそ候へ』と申けれども、兵衛佐はそらほけて返しもせずして、『いさ守安、せめて(26オ)かゝみの宿まで』とのたまへは、あまりにいとをしさに、『老母は何ともなけはなけ。いつく迄も御供せん』とおもひさためて、『いつく迄も御供申さん』と申せは、兵衛佐、『それこそ有ましき事なれ。心さしはさる事なれとも、汝か母のなけき、偏に頼朝かひかこと成へし。かうくの心せしをむなくせは、仏神の御心に背くへし。みやうりよちかひなは、頼朝かためをそし』とて、互に名残をおしととめられけり。諸兵衛佐はふわの(26ウ)関越て美濃国あふはかの宿を過る時、父義朝の此宿にて兄朝長を手にかけてうたれし心中思やしられて哀なり。杭瀬川を渡る時は源光か舟に乘て下られける川なれば、しらぬ人の舟こぎ行も、心なき水のなかれもなつかしく、尾張国勢田の宮に着て、『故義朝のうたれし野間のうつみはいつくそ』と所の人に尋れば、『なるみの方をへて霞わたれる山こそそなたよ』と申ければ、『南無八幡大菩

薩、頼朝を世にあらせ(27オ)ましませ』と、心のうちに泣々きせひ有しそをそろしき。兵衛佐は当社大宮司季範か女のはらなり。此腹に男女三人あり。女子はばうもんの姫とて、後藤兵衛実基やうくんにて都にとまりぬ。男子は駿河国かつらといふ処に有けるを、母かたのおち木工頭朝忠と云者からめとりて平家へ奉る。「名字なくては遠流のならひなし」とて、まれよしと名付られ、土佐国けらといふ処へ流されける。其後はけらの冠者とそ申ける。そもく保元(27ウ)に為義誅せられ、平治に義朝うしなはれしより、平家の一門繁昌してわかみは太政大臣にあかり、子息は近衛の大將左右にあひならふ。親類昇進思ふさまにて、卿相雲客六十余人なり。仁安二年十一月、やまひにをかされて歳五十一にて出家して、法名淨海とこそ申けれ。兵庫に島をつきて諸国運送舟をとめ、福原に宿所をたて、大略在国せり。あるとき淨海遊覧のため、一門ならひさふらひと(28オ)数十騎打つて、布引の滝へ上りける。難波の二郎夢にあしき事をみて、其日は宿所にこもり居たり。傍輩共、「弓矢とる者の夢見のあしき物いみなといふ事、口をしき恥辱なり」とわらひければ、『実も』とやおもひけんをくればせに出来り。布引の滝みて帰られけるに、山のもとにて俄に風あらく吹をろし、空かきくもり、いなひかりをひたしく、いかち雲をひくす。難波次郎色をうしなひ、かたはらの(28ウ)者に物申けるは、『夢みのあしきとは此事なり。悪源太のきられし時に、『しなはいかつちとなりてけころしなん』といひしつらたましゐか、つねに錦にたちておそろしかりし心にや、過し夜の夢に見えつる也。鞆のせいなる物のひかりてたつみのかたへ飛つるをは人々見給ひつるか、それ源太のおんりやうかと覚えつるなり。それより帰りさまにそ常房は一定けこ

ろされんと覚る。命のうせん事は一定。いかなる雷^{イナズナ}にてもあれ、一刀は(29才)きらんするぞ。うせん後のせう人に立給へ」とて、刀をぬく。^(ママ)安のこく難波かうへに黒雲うすまき下て、雷をひたしくなりさかりけり。浄海すてにあやうく見え給ひけるに、弘法大師の御筆の理趣経を錦の袋にいれてくびにかけられけるを、打ふりくしたまひければ、雷なりあかり、相国はたすかり給ひけり。難波はけころされて有けるを、雨はれてみければ、五体すんく^{／＼}にぎれて目もあてられぬさまなり。太刀はつはまてにゑ(29ウ)かへりけり。彼大師の御筆なかりせば、相国もうせ給ひなまし。昔北野天神配流の御恨によて、雷となりて本院大臣を討し給ふ。是は権化の世に出て讒^{イナヅマ}ねいの臣をしりせられ、忠臣を賞すへきまつりことをしめさんかためなり。今の悪源太は配官の臣となりて、はくちうにうたれしいきとをりをつう^(しき)て、きりての難波をけころしけん。「しらす、いかなるこんじやうにてか、まのあたりいこんを死て後さんしけん」と、おそろゝ人とも(30才)おほかりけり。さて清盛は家中にしんしやうなるつほねをしつらひ、常葉をすませてかよひける。むかしよりいまにいたるまで、かしこき御門もたけき武士も、此道にはまよひけり。されはまつりことをしらす、いさめる道を忘れける。「しかし、傾城の色にあはさらんには」と、かさん居士か書をきけるもことほりかな。常葉腹の子とも三人、年月をへてしは長大して、兄今若醍醐寺にて学文し出家して、法名禪師公金^{イサナ}済と名乗けり。(30ウ)異名は悪禪師とて、希代の悪僧なり。次男乙若は八条のみやにめしつかはれて、卿公円齋とて坊官にてそ有ける。弟の牛若くらまの東光坊阿闍梨蓮恩弟子、禅林房阿闍梨寛実^{イサナ}に同宿し、沙那王とを申ける。十一歳家々の景図^(まなづか)を

覚へ、諸道の日記なとを見る程に、心さかしく成てわかみの有さまを思ふに、「清和天皇十代の末をうけ、九代六孫王より八代多田満中後胤、伊与入道頼義末葉、(31才)八幡大郎義家より四代、六条判官為義孫、左馬頭義朝子にて有ける物を。伊与殿相模守にて有しとき、奥州の貞任・宗任せめ給ひし。其功成なかりしかは、八幡殿奥州に下向して、後三年合戦に打かちて出羽守になられし。其時の心に我もなつて、父義朝の本望をたつし、世にも出はや」とぞ思ひける。坊主の禪師坊に申、「毘沙門のはき給へるつるき、すこしのほとからん。太刀まうけてとりかへてたへ」とぞ申(31ウ)ける。禅林房、「有へからざる事なり。本尊の御宝剣なり。別当・権別当以下大衆に此ときこえなは、あしかりなん」とやう／＼申ければ、かなふましとやおもひけん、其後はこはさりけり。となりの房におとなしき児有。かたらひて常に出京して、小太刀打刀などにて辻切をし、人を追もにくるもはやし。ついちかへはた板なと、をとりにゆるもさういなし。僧正か谷にて天狗はけ物のなん所へよな／＼行て兵法をならひ、彼難所を夜る／＼^(なむ)こえて貴布祢の(32才)社へそ参りける。「そのふるまひ、さらにほんぶにはあらず」とて、寺僧等したをそふりける。さる程に常葉、浄海におもはれて女子一人まうけり。其後すめられて、一条大蔵卿長成に相くして、子ともあまた有けるとかや。沙那王をは師の阿闍利も坊中禪徒も、「はや出家し給へ」と申せば、伊豆国におはします兵衛佐に申合、「それと申されは剃へし。其上兄二人法師になりたるたにいふかひなきに、身にをきては(32ウ)そるましき也。しゐてそれといふ人あらは、つきころさん」といひければ、「けにも人つきよけるちこの眼さしなり。をそろし／＼」とぞ申あひける。おうち師の蓮文も師

匠の禪林も、上にはくむやうなれとも、心中をしりたる故にや、内心はいとをしくおもひけり。其比毎年陸奥へ下る金商人、つねに鞍馬へ参りけり。沙那王か坊を師と頼て常に有けるに、沙那王ちかつきよて、「我を陸奥へぐして下らは、ゆゑしき(33才)ものを一人しりたり。金二、三十両をもこいてとらせん」とかたらへは、「さうけ給る」と約束す。又坂東武者中に諸陵助重頼といふもの有。是もくら馬へまいりけり。又沙那王かたらひよて、「御辺はいつくの人ぞ」、「下綱の者にて候」、「さていかなる人の子、いつれの姓ぞ、名をは何と申せ」などこさかしくとへは、「深栖三郎光重子諸陵助重頼、不肖の身にて候へとも、源家末葉なり」と申。「さてはさうなき人ござんなれ。たれとか申うけ(33才)たまはり給ふ」、「兵庫頭頼政とむつひあひ候」と申。「かやうにたつね申事、子細有なり。此わらわは平治の乱をおこしなはれし左馬頭義朝末子。九条院雑仕常葉腹に三人候。兄二人は法師になりぬ。沙那王は男にならはやとおもふ。男になりなは、平家いかと思はんすらんとのほゝかり有。御辺つれて下り給へ。物射てあそはん」と申されければ、諸陵助申やう、「伴ひ申て児かどいてとがめられ申さんすらん」と申せは、「此わらは失(34才)て候へはとて、我身の程を思ひしるに心やすし」といひて打なみたく、「さらは」と約束してけり。沙那王十六と申承安四年三月三日の暁、鞍馬寺をそ出にける。世中におそれて上にはくむよしなれ、なひ／＼の心は人にすくれし間、申うけ給ひし同宿児など名残をそおしみける。其日かたの宿につきて、夜半はかりに手つから髪をとりあげ、日比ふところ持たりし刀をさし、つねにざれてぎけるゑほしほこりをし(34才)のこひきたりけり。次の朝出けるに諸陵助、「御元服候也

けり。御烏帽子おやは誰ぞ」、「みつからなり」、「御名はいかに」、「源九郎義経也。弓矢なくては」と有しかは、征矢一腰弓一張たてまつる。矢をひ弓持まゝに、「馬は御心のまゝに」と申せは、道すからえらみのり、馬の足立よき処にては、はせ引し物射ならひてを下られける。駿河国きせ川へ着て、「北条へよれ」とのたまへは、「父にて候深栖は見参に入て候へとも、重頼はいまたそぞぎなし。(35才)先々国へをちつかせ給ひて、御文にて申させ給へ」と申せは、「よきはからひなり」とて、とをりけり。深栖状にて此由を兵衛佐殿に申たりければ、「さる者候。相構て不便にし給へ」と御返し有けり。かくて一年はかり有ける。御曹子野に出てかりし給ひけるに、馬盗人の有を、人々からめんとしけれとも、其たけ六尺はかりなるおとこの、大木をうしろにあて、刀をぬぎ、死くるひせんといなりける間、召捕ものなし。まして近所による人なじ。数十(35才)人あれとも、もてあつかひたりけるに、御曹司かの盗人のわきの下へつとより、刀持たるひちをし、かに足にてけたまへは、刀をかりとをとす。さてはかまのこしにとりつき中にあげ、したゝかに打つけからめとる。又或時深栖か家の近所百姓の家へ盗人おほく入たりけるに、彼御曹司太刀はかりにて出合、ぬす人六人うちへはしり入、四人をその庭に切ころし、二人にはておほせて、我はつゝ、かまなりけり。此事國中にひろふし(36才)ければ、「平家に聞えなはあしかりなん」とて、深栖もてあつかふ。其後いづへ越て、兵衛佐に対面す。「義経すてに人となりぬ。世の聞えいか、と、当国他国までさしたし候なり。身の事はつきなり。御ためこそいたはしけれ。人のしらざらん国へ落くたり、世間のやうをも見候はゝや」と忍び／＼に申されければ、兵衛佐のたまひけるは、「陸奥

国に大切におもふへき者一人有。それを尋てゆくへし。上野国大窪
太郎女十三のとし熊野へ(36ウ)参りし時、故頭殿見参に入て、
『この後いくらの男子出来とも、是を嫡子にたて候へし。御覽し
せ給へ』と申たりしか、父にをくれて後、『同人の妻にならば、平
さふらひのつまにはならし。奥州秀衡つまにならん』とて、女よは
ひに行ほとに、秀衡郎等信夫小太郎といふ者道にてよことりとめ
て、子共二人まうけたり。其後信夫におくれて二人の子共をはへち
に置、後家ふんやしきなとえて、こともかけてあんなる。それを尋
て行。ふみをやらん』と(37オ)のたまへは、御文を給て陸奥へそ
下りける。彼尼夜に入てたいめんし、「兵衛佐のをさなたちも思
出、故左馬頭殿をおさなめによき男かなとおもひ奉りしか、似惡こ
そおはすれとも、其御子かと覚るは、もし兵衛佐殿御おとにてお
はするか」と申せば、「さそ」と名のり給ひけり。尼申やう、「男
子二人もちて候。佐藤三郎・佐藤四郎と申候。三郎は上戸にてのみ
えひめれは、理も非もしらぬあら物にて候。弟の四郎は下戸にて、
実法の者にて候。彼四郎をまねき(37ウ)て申やう、「この御事は
伊豆におはします兵衛佐殿の御おと、こ也。相構てもてなしかしつ
き奉れ」とこま／＼と申せば、「うけたまはりぬ」と領掌す。たかの
国府へうち越て鞍馬にてけいやくしける金商人に尋あひ、「商人は
いつくへもすいさんするにくるしからぬもの也。秀衡たちへくして
行」と宣へは、ひらいつみへ越てけり。京より下れる度に沈麝香薰
物なとりける女房につきて申入たりければ、秀衡たいめんす。
「いかなる(38オ)人にておはしますそ」とへは、「平治の乱に
亡し左馬頭義朝末子にて候」か、「手つから身つから元服して源九
郎義経と名乗たまふ也くせ人こさんなれ。此日比承及たり。いとを

しき人こさんなれ。もてなしかしつき奉らは、世の風聞もしかるへ
からす。又御ためもいたはしかるへし。出羽・陸国両国には、国司
目代の外は秀衡まゝなり。其内にをはしましていかならん人をも頼
ておはさは、みめよき冠者殿かなとて、智にとる人も有へし。養子
に(38ウ)するも有へし。御所存を心えて始終のためを申すなり。
かゝるうちとけ物かたりなとをは、秀衡が家僕にももらし給ふへか
らす」と末頼母敷を申ける。さてよしつね、「いつしかなる事にて
候へとも、今度義経をふちして候也金商人に物こつたたく候へ」
と所望有ければ、「金商人ならは是にしかし」とて、砂金三十兩と
らせてけり。其後信夫へ越てつねは坂東へこえ、ちふ・足利・三
浦・鎌倉・小山・中沼かれらにちかつきて、爰に十日かし(39オ)
こに五日つかはれける。よき所領持たる者をみては、「きやつを討
てこれか所領を知行し、ちからつき本意をたつせはや」とおもひ、
まうせいなるものをみては、「きやつ(つづ)かたらひてむほんおこさはや」
とを思ひける。上野国の松井田といふ所に下劣の亭に一夜とまられ
たりけるに、主しのおとをみて、「きやつかまなこさし、所存ひ
とつは有らん。かれらをかたらひて平家をほろぼさんときのはたさ
しにせはや」とおもひてとまらんとし給へは、此男(39ウ)申や
う、「此冠者、かたちはたしにてまよひありくへきものともみえ
す。はくちうちか盗人か、我をねらひてころさんとする人なり」と
て、追出しけり。九郎冠者都を出て七年と申治承四年八月十七日、
兵衛佐頼朝、伊豆国の目代和泉判官兼高を夜討にせしよりこのか
た、石橋山の合戦・こつは・きぬかさ所々の戦に討かつて、安房国
・上総国へわたり、上総介已下なひかぬものなし。下総へこえて千
葉介を召くせて武蔵の国へ出しかは、したかひ(40オ)つかぬ兵な

し。此事京都に聞えしかは、醍醐の悪禪師・八条の卿公、関々のためられぬさきにとてをいとりかけ、修行の体にて夜を目について下りけり。平家これを聞て、「土佐へなかされしまれ義うちて参らせよ」と、当国の住人蓮池次郎家光に仰る。家光御曹司に申けるは、「兵衛佐殿伊豆国にて御むほんをおし給ふとて、君を討奉れと平家より仰下されて候」と申ければ、「うれしくしらせ(40ウ)たり。父の御為に法花経を毎日よみ奉るか、今日いまたよます。しばらくいとまをたへ」とて、持仏堂に入、法花経心しつかにとくしゆし、はらかききりてそうせにける。さて九郎冠者は秀衡か宿所平泉へ打こえて、「兵衛佐むほんしかく」となり。いとま申、打越なん」とのたまへは、秀衡たいめんして、「さためて御用にぞ」とて、こんちのにしきのひたゝれに紫すこのよろひ、金つくりの太刀そへて奉る。「御馬はいか程も」と申せば、黒き馬の八寸(41オ)はかりなるをはしめとして十二疋奉る中よりあらみとて、金覆輪のくらをきてそのりたりける。佐藤三郎はおうやけわたくししたゝめて参らんとて、とゝまりぬ。弟の四郎は御供しけり。白川関ふさかりてければ、なすの湯へといひて、山路にかゝりてとをりけり。金商人もとは京家の青侍にて有けるか、身まつしてせんかたなきにはしめて商人となりけるか、今度九郎冠者につきて又侍になされ、窪の弥太郎と申ける。(41ウ)伊勢三郎と申は、もとはいせの国の者なり。上野国松井田に住て、家中ゆたかなりき。御曹司忍ひてかれか元におはししを、おそれて追出したりしものなり。かれかもとへつき給ひて、「先年これに有し時はよもしろし。兵衛佐頼朝弟源九郎義経とは我事なり」と名のり給へは、「やう有人と見奉りしか、ちかはさりける物を」とて、「御伴申さん」とて、供奉しけり。

り。兵衛佐相模大庭野に十万余騎にて陳をとりておはしける処へ、其勢百騎はかり(42オ)白はたさゝせて参られたり。「何ものぞ。さうなくにしきのひたゝれをき、しらはたさゝせる事心へす」と宣へは、「源九郎義経」と名乗給ふ。「是ほとに成人するまで見ざりつる事よ」とて、昔をやおもひ出られけん、涙くみて、「八幡殿陸奥国の後三年の合戦のとき、舍弟義光刑部少輔にておはしけるか、官をしゝつるふくろをちんのさゝめて、陸奥国金沢の城へまいられたれば、八幡殿、『故伊与入道殿ふたゝひ生れ(42ウ)かへり給へる心ちす』とよろこひ、鎧の袖をぬらされける先祖のむかしかりも、たゝいまのやうにおはえ候」と兵衛佐のたまへり。一条・武田・小笠原、かゝいの国よりうつてをもむく。彼目代広政其勢いくほともなかりけれども、平家に心さしの輩一千余騎はせあつまる。甲斐源氏三千余騎を三手に分、中により籠てせめつれば、目代一こらへもせずたれけり。平家此事をきゝて、くわん軍を下さる。大將軍には権左少将惟盛、その勢五万余(43オ)騎^(に)て、富士川西のきし蒲原に陳をとる。頼朝二十万余騎にて、足柄・箱根二の山を分越て、駿河国きせ川に陳をとる。合戦明日と定りたりけるに、富士川におり居たる水鳥の大せいたちける羽音をときのごゑときゝなし、箭ひとつをたにも射す、にけのほりけり。養和元年三月、平家美濃のすのまた河にはせむかふ。「十郎藏人行家は、一門の長者たるへし」と高倉宮のりやうしにはなされしかとも、兵衛佐と木曾と(43ウ)二人の甥共に権をとられて、纔に五百余きにて墨俣川の東のきしにひかへたり。八条卿房円斎は、「親のかたきの平家を河のむかいになかゝをきて合戦をせずしてあらは、人の寿命しりかたし。千万夜の間にも死たらは、後生のさはりなるへし」といふまゝ

に、我にしたかふともから五拾余騎、川をわたして大勢の中へかけ入けり。平家大将、頭中将重衡・のとのかみ教経なり。此大勢に取こめられ、卿房円齊はうたれにけり。寿永二年七月廿(44才)五日、木曾冠者都へせめのほり、平家みやこを落ぬ。「池殿御子息は御とまり候へし。故禪尼をみ申と存へし」と、内々起請代の状をしんしたりければ、それをたのみて留り給ふ。本領少も相違せず、其外所領あまたまいらせられけるとぞ聞えし。義朝討率りける長田庄司忠宗・子息先生景宗、平家へもまいらす。重代の主君を討たりしかば、天のせめをや蒙りけん、郎等五十きにてくひをのへ、鎌倉へそ参りける。(44ウ)兵衛佐、「いしうまいりたり」とて、土肥次郎に預られけり。其後木曾ついたうのために蒲冠者頼頼・九郎冠者義経兄弟をさしのほせらる。木曾をついたうして、其後一谷の合戦に討ち、合戦の次第住進有。御使殊更、「長田父子合戦いか」と御尋有。「大かうの者にて候ける。所々のふるまひきはまりなき」よし申ければ、「おやこに向後合戦はしきすな」と宣ひけるこそおそろしけれ。さて平家は長門国たんのうらにて亡ひはて(45才)ぬ。其後長田鎌倉へ参りたりければ、兵衛佐成綱に申合たる子細有。「とく／＼我國へ歸りて、故殿の御はたひを弔奉れ」と仰られたりければ、長田畏てのほり、安堵の思ひをなす処に、野上小次郎をしよせ、忠宗・景宗をからめとる。張付にこそさせられけれ。よのつねのはつつけにはあらず、義朝のはかの前に板を敷て、左右の手あしを大釘にて板に打付て、足手の爪をはなしてつらのかはをはき、(45ウ)四、五日の間をきてなふりころしにころしてけり。「さうてんの主君を討て、子孫繁昌せんとこそおもひつらめ。なれとも因果のむくひにはちをさらしけり。きやうこうも末代もかやうの事

をわきまへすふるまはん者は、名こそ替とも、長田庄司に同じかるへし。おそろし／＼」とそ人々申ける。さて池殿の候人丹波藤三鎌倉へまいり、御庭にすいさんす。「昔池殿に候し頼包こそ参りて候へ」と申せは、鎌倉殿は御心得有、「丹波の藤三か」と(46才)のたまへは、「さん候」と申。「いしう参りたり。頼朝にむかひてのはうし、身にあまる人なり。其上池殿のこうにんにて、かた／＼大事と存聞人なり。ひきて物をせはや」と仰られければ、きんじゆのともから納殿をあげ、豹虎皮鷲の羽鷹の羽絹小袖、めん／＼に出したり。其外鎧はらまき太刀刀、数をしらす、頼包か前後につみたりければ、頼包見えぬほとなり。「さてそせうはなきか」とのたまへは、「丹波国ほその郷は重代の所(46ウ)領にて候を、権勢の人に押領せられ侍」と申ければ、「頼朝院へ申さは、子細あらし」とて、御判を頼包にたひにけり。「御引手物の重宝、都まで持送へし」とて、宮こまでこそをくらられけれ。九郎冠者義経、梶原かさんけんによて鎌倉殿に中たかひ、陸奥へ下り給ひて、秀衡を頼みて年月を送られけるか、秀衡一期の後、康衡をすかして義経を亡し、其後又康衡をうちし今日は、日本国中のこの處なく打した(46ウ)へ給ひて、(47才)奥州たかの(国か)府につかせ給い(47ウ)。「日本国中に心かゝり、大事におもふ者二人有。くひをつかれ奉りたりし池殿の御子大納言殿は、世にあらせ奉りぬ。もととりをしませたりし広結源五に、いまたおんをかへさぬこそ心に(47ウ)」。斎院の次官親能申されけるは、「守安双六の上手にて、常に院の御所へめさるゝ者にて候」と申せは、「さては頼朝、わたくしにいかてかめすへき」とて、めされす。親能に、「鎌倉殿御所存かやうに候」など申のほせたりけれ共、(47ウ)夜る昼る双六の憚なきとて、下向せず。さて建久元年十一月七日、鎌

倉殿はしめて御上洛有。近江国せんの松はらに着給ふ処に、やせを
とへたる老翁、同じいてなるうば引くして参りたり。「大勢の中
をかき分／＼まいるものぞ、らうせきなり」と申せは、「殿はしろ
しめしなん。参へき者なればこそとて、御前にまいるたれ」、「汝は
何者ぞ」と御たつね有れば、「昔君のしはらくまし／＼侍し浅井の
きたの郡の老翁とうば（48才）にて候。今まで候をくやくおもひ
候つるに、只今君の御上洛をおかみ奉る事を、よくそとうれしくて
参りて候」と申せは、「事はしけれ、思はすれたり。いしうもまい
りたり。汝かもちたる物は何ものぞ」と仰せられければ、「君の
昔まいり候しに／＼酒にて候」とて、土かめに入て参らせたり。鎌
倉殿ゑみをふくませ給ふて、酒肴（さかづき）碗飯の色々いく千万と有には御め
もかけず、此さけをめつらしとて、三度きこしめして、「子の（48
才）の一人有し、まいらせよ。不便にせん」と仰られければ、めし
くしてそまいりける。近江の冠者として、召つかはる。あだちの新三
郎清綱か事なり。白鞍をきたる馬二疋、なかもち三合に絹小袖ふた
にあまるほと入てそ給りける。さて鎌倉殿院へ御参り有。むかし召
つかひし事とも思召出て、哀にふしきにそ思召。ひけ切と申太刀錦
の袋に入てをかれたるを召出し、「是は源家てうほうと聞召され、
清盛かもちたりしを、御まほりのため（49才）とてめして、此年来
御所中を出されず。しかれとも家の名物なれば、定て所望なるら
ん」とてそ下されける。頼とも畏て三度礼拝し給へり。たいしゆつ
す。其後広結源五守安召て、馬物具太刀刀絹小袖、其かすをつくして
給けり。鎌倉へ参らざらりし（6箇年）によて、御恩はなかりけるとそ承候。
建久三年三月十三日、後白川院かくれさせ給ひぬ。其後広結源五かま
くらへ参りければ、「早々に参りたらは、（49才）国をも庄をも申

さたして給へけれども、参らねは力及ず。關処の出来ほと少処なれ
とも馬かへ」とて、美濃国たきの庄を半分給りける。守安つまも尾
張の国野間の者の女なり。故義朝うたれ給ひし時、射死（討死）したりける
鷲巢源光後家なり。一兩年後守安に嫁たりけり。夫婦ともに奉公の
忠節なればとて、美濃上中村を給はりけり。建久九年十二月に□（下）向
す。鎌倉殿守安をめされて、（50才）「明年正月十五日過てまいれ
よ。多氣を一円にとらせん」とそ仰られける。正治元年正月十五
日、鎌倉殿御とし五十三にてうせ給ひけり。かゝる間、守安をんを
蒙るに及ず。守安申けるは、「故大將殿御代をとらせ給ふへき夢想
は、守安こそ見て候し」とそ有のまゝをかたれば、西院の次官親
能、「その鮑のを、給てしよくすとに見たらは、大なる御恩を蒙
るへきに、懷中すと見けるあいた、御恩はなかりける」といひ（50
才）ければ、兩人わらひてのきにけり。九郎判官殿二歳にて母常葉
にいたかれて有しときは、大政入道わかしそん亡すへしとおもは
ねはたすけをき、今はかれに累代家をうしなひける。てうの狐子は
はかまのうちにかくれてなかず、しんのいそんはつほのうちにやし
なはれて人となる。すゑたえましきは、かくのことくの事をや。